

茨城県那賀城跡
常陸大宮市

常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書

平成17年9月

常陸大宮市教育委員会

茨城な県か常陸大宮市じょう那賀城跡

常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書

平成17年9月

常陸大宮市教育委員会

挨拶

常陸大宮市は平成16年10月に那珂郡大宮町・緒川村・美和村・山方町、東茨城郡御前山村の2町3村が合併し、新生常陸大宮市が誕生しました。古代の山方町は久慈郡八部郷、大宮町は真野郷と倭文郷、美和村は那賀郡朝妻郷、緒川村は那珂郷、御前山村は阿波郷と川邊郷に相当します。中世は久慈郡佐竹郷に本拠を置く佐竹氏によって久慈西郡として繁栄していました。

那賀城跡は緒川地区の大字那賀字御城に位置しております。古代の郷名が那珂郷であることから現水戸市の台渡（古代の河内郷）の郡衙（古代の役所）に移動する前の中心地と考える人もおります。その後「俵藤太」の話で有名な藤原秀郷の子孫の藤原道資が那賀城に居住して那珂氏となり、室町時代に至り、佐竹氏の家臣、小田野氏によって維持されていたようです。

今回の調査によって、その一部が判明しました。那賀城跡の歴史は一地域によるものではなく、古代・中世・近世・近代に続いてきた常陸大宮市の文化の発展を示すものであります。

文化財は地域の歴史、民俗、文化などを理解する上で欠くことのできないものであり、特に埋蔵文化財は記録に残っていない歴史を考古学的な調査と出土遺物によって解き明かすことができます。

今回の発掘調査をもとに「那賀城跡」の報告書が刊行されましたことは、常陸大宮市の歴史文化を知る上で大変意義深いことであり、さらに郷土の歴史を顧みて常陸大宮市の未来へ繋ぐことが私たちの使命と云えます。今後はこの資料が広く活用され、郷土の姿を理解する一助にされますことを期待致します。

最後になりますが、発掘調査にあたって御指導、御協力いただきました茨城県教育庁文化課、茨城県埋蔵文化財指導員並びに調査を担当されました日本窯業史研究所の皆様、関係機関、関係者の皆様方に感謝申し上げます、挨拶といたします。

平成17年9月

常陸大宮市教育委員会

教育長 坂本 忠夫

例 言

- 1 本書はKDDIの通信設備設置に伴い、日立電線株式会社から発掘調査業務委託を受けた、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は茨城県常陸大宮市那賀字御城678地内に位置する。
- 3 本調査は平成17年5月23日～6月8日まで行い、調査面積は225m²である。
- 4 本調査は茨城県教育庁文化課、常陸大宮市教育委員会緒川事務所の指導により、日立電線から委託を受けた日本窯業史研究所が調査団を組織して、調査を行った。
- 5 調査の記録と組織

試掘調査 平成17年3月16日

担当者 川崎純徳（茨城県埋蔵文化財指導員）

概 要 2×10mのトレンチ調査により、柱穴状のピット、円形・方形の竪穴遺構を状況から中世の遺構とし、内黒土師器が出土していることから、奈良・平安時代の竪穴住居跡の存在を推定している。

本 調 査 平成17年5月23日から6月8日

調査指導 茨城県教育庁文化課

文化財保護主事（文化財担当） 飯島一生

茨城県埋蔵文化財指導員 川崎純徳

常陸大宮市教育委員会緒川事務所

調査担当 日本窯業史研究所代表 菅間智代

調査部長 水野順敏

主任調査員 河野真理子

調査員 河野一也

調査参加者 上田直次 斎藤 務 川上 清 藤田善伸 本橋 博

岡崎喜一 長嶋常男

- 6 本書の執筆は河野一也、編集は河野真理子が行い、水野順敏が補訂した。遺構図面の整理、遺物実測及びトレースは河野真理子、遺物写真の撮影は河野一也が行った。
- 7 出土遺物及び図面、写真類は常陸大宮市教育委員会が保管する。
- 8 発掘調査を実施するにあたり下記の方々からご協力を頂いた。

小林工務店 緒川村ミニシルバー人材センター 石川 豊 小林 茂 長山金夫 西村和夫 関 六郷衛
中村敏男 二野瀬和則 会沢 薫 内田英徳 石塚 真

凡 例

- 1 本遺跡での遺構は竪穴住居跡をHT、縄文時代の土坑をJD、中世の土坑をCD、掘立柱建物跡をT、柱列をHの略号で表記した。
- 2 第1図は緒川村図（縮尺2万5千分の1）を部分複製した。
- 3 遺構実測図の縮尺は1/60、遺物実測図の縮尺は石鏃が原寸、土器は1/3とした。
- 4 写真図版の遺物番号は挿図の番号と一致する。

目次

第1章 はじめに

第1項 調査に至る経緯と経過	5
第2項 遺跡の位置と環境	5
第3項 周辺の遺跡	5
第4項 標準層序	7

第2章 遺構と遺物

第1項 縄文時代	8
土坑	9
出土遺物	10

第2項 奈良・平安時代

第1節 竪穴住居跡

1号住居跡	12
2号住居跡	13
3号住居跡	14

第3項 鎌倉・室町時代

第1節 土坑

1号土坑・2号土坑	14
3号土坑・4号土坑・5号土坑	16

第2節 小穴群

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡	16
2号掘立柱建物跡	18

柱列

1号柱列・2号柱列・3A号柱列	18
3B号柱列・4号柱列・5号柱列・6号柱列・7号柱列・8A号柱列・8B号柱列	19
9号柱列	21

中・近世出土遺物	21
----------	----

第3章 まとめ

第1項 縄文時代	22
第2項 平安時代	22
第3項 室町時代	24
第4項 那賀城跡の現況	24

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡	第10図	鎌倉・室町時代全体図
第2図	標準層序	第11図	中世土坑
第3図	調査範囲位置図	第12図	掘立柱建物跡
第4図	調査区全体図	第13図	柱列（1）
第5図	縄文時代土坑	第14図	柱列（2）
第6図	縄文式土器	第15図	中・近世出土遺物
第7図	石鏃	第16図	地籍図
第8図	竪穴式住居跡	第17図	那賀城全体推定図（石川 豊氏作成）
第9図	1・2号住居跡出土遺物	第18図	那賀城跡と小字名

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧
-----	--------

図 版 目 次

図版1

- A 調査前全景（南より）
- B 平面形確認（南より）
- C 1号住居跡（西より）
- D 1号住居跡 遺物出土状態（西より）
- E 1号住居跡 カマド前方貼床（西より）
- F 1号住居跡 掘方（西より）
- G 1号住居跡 カマド掘方（西より）
- H 1号住居跡内柱痕（3号住居跡柱穴）（北より）

図版2

- A 2号住居跡 北壁土層に床面遺存（南より）
- B CD1 半截土層（東より）
- C CD1 全景（東より）
- D CD1 陶片出土状態（北西より）
- E CD2 半截土層（東より）
- F CD2 全景（東より）
- G CD3 半截土層（東より）
- H CD4 半截土層（東より）

図版3

- A CD4 （北より）
- B CD5 （南東より）
- C 1号住居跡、CM1、CD1（西より）
- D 掘立柱建物跡（東より）
- E 調査区北東小穴群（北西より）
- F JD1・2 全景（東より）
- G JD3 半截土層（北東より）
- H 東壁南方整地状況（南東より）

図版4

- A 南壁下漸移層（北東より）
- B 遺跡全景（南より）
- C 那賀城跡遠景 岩下橋より望む（北西より）
- D 那賀城跡 登り口（東より）
- E 調査区東空堀（北東より）
- F 那賀城跡 東斜面からの空堀（東より）
- G 那賀城跡 東斜面（南より）
- H 那賀城跡 主郭内の間仕切溝（東より）

図版5

- 出土遺物（1）

図版6

- 出土遺物（2）

第1章 はじめに

第1項 調査に至る経緯と経過

那賀城跡は茨城県常陸大宮市那賀字御城678他に所在する。遺跡是那賀城跡(遺跡番号347-004)の城館跡として登録されている。

当地内は平成17年2月にKDDIが電波塔建設を計画され、平成17年3月16日には茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏により試掘調査が行われ、奈良・平安時代の竪穴住居跡と中世の遺構の存在を推定した。それを受けて常陸大宮市教育委員会緒川事務所から日本窯業史研究所に発掘調査の依頼があり、4月26日には教育委員会と事業者である日立電線、日本窯業史研究所で最終的な打合せを行った。調査は鉄塔部分の15×15mの225㎡である。

発掘調査は平成17年5月26日から6月8日まで行った。遺構の平面確認面までは、北西隅で40cm、南東隅で80cmである。平安時代の住居跡は上層が削平され、床面のみか柱穴のみの確認である。また、中世の小穴が多数認められたが、大きな建物の配置は想定できなかった。6月1日には、茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳氏、常陸大宮市教育委員会緒川事務所の石塚真氏の視察があった。また、終了後の6月14日には茨城県教育庁文化課の飯島一生氏の視察があり調査成果の説明を行った。

第2項 遺跡の位置と環境

本遺跡の所在する常陸大宮市は平成16年10月に、美和村、山方町、緒川村、御前山村、大宮町の2町3村が合併し、新生常陸大宮市となった。北辺は太子町、東辺は新生常陸太田市、南辺の東は新生那珂市、西は新生城里町、西辺は北から栃木県那須郡馬頭町、烏山町、茂木町に隣接している。国道293号線は栃木県足利市から栃木県北辺を通り、馬頭町から常陸大宮市美和地区で茨城県に入る。さらに緒川地区から大宮地区を抜け日立市の太平洋に至る。那賀城跡はその緒川地区上小瀬から県道12号の烏山・御前山線を南の水戸方面へ約3.7kmにある。

地理的には茨城・栃木・福島の3県にまたがる八溝山系の鷲子山塊南端近くにあたり、標高75m前後である。那賀城跡の東岸には鷲子山塊を源流とする多くの支流が美和地区の下桧沢で緒川となり南流し、御前山地区の野口で那珂川と合流している。河川の流路は谷が深いのが、段丘上は広がっている。植生は谷間が棚田、斜面は雑木類の自然林、台地上は畑地あるいは果樹園として利用されている。

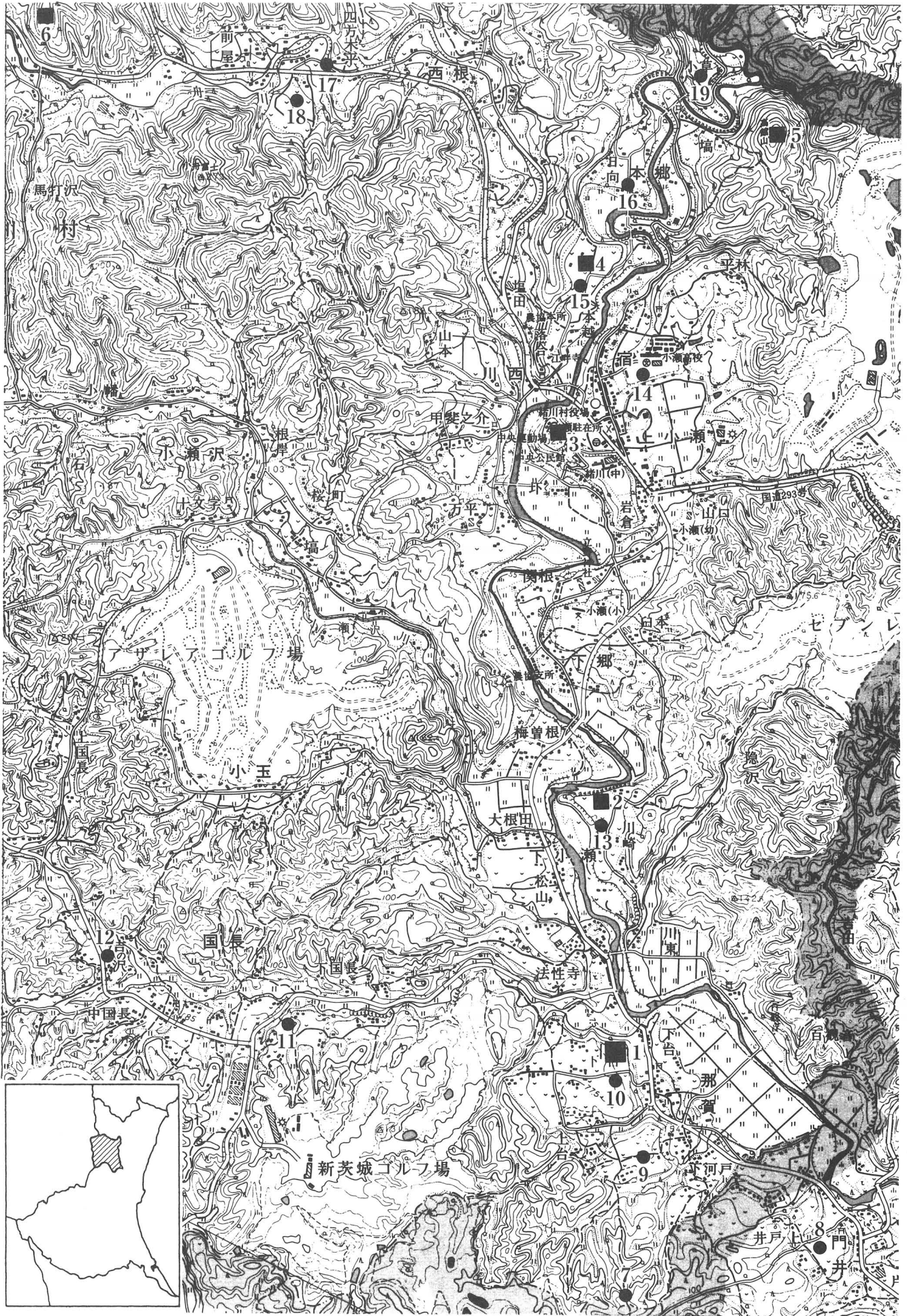
第3項 周辺の遺跡(第1図、第1表)

本遺跡を含めて周辺には城館跡と縄文時代の散布地とした多くの遺跡が存在する。しかし他の地域に比し、弥生・古墳時代から奈良・平安時代の遺跡は非常に少ない。これは分布調査の精粗によるものと考えられる。今回は公開されている資料により周辺の遺跡を見る。

1～6は城館跡で1是那賀城跡、2は川崎城跡、3は小瀬館跡、4は小瀬城跡、5は高館城跡、6は小舟城跡である。これらは蛇行して南流する緒川の屈曲する急斜面の段丘上に位置している。また、見通しの良い台地上一連に構築されたのであろう。配置を見ると小瀬小学校付近にも何らかの施設がある可能性がある。名称と立地から見ると、3は城主の居館、5は要害の出城であり詰城とも考えられる。他は城館であろう。城館跡はすべて鎌倉・室町時代とされている。

7は包塚古墳で径8m、高さ2m程の円墳と推定されている。緒川地区唯一の古墳である。

8は門井遺跡で散布地とされているが時代は不明。9は陳向椋内遺跡で南北300m、東西200mの広大な遺跡で縄文時代の大集落と推定される。10是那賀城跡と同地とされていたが、散布地は推定城跡の周辺まで広がっているため、本跡とは別けて那賀上台遺跡とした。遺跡は南北400m、東西300mに及ぶ。那賀城跡は重複し、この中



第1図 遺跡の位置と周辺遺跡

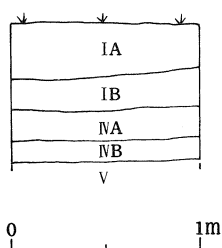
に含まれる。11は国長平遺跡、12は堂ノ入遺跡、13は川崎遺跡で、川崎城跡と重複している。14は松原遺跡、15は上ノ台遺跡で小瀬城跡と重複している。16は本郷遺跡、17は四方木平遺跡、18は上の平遺跡、19は豆入平遺跡である。これらの遺跡はすべて縄文土器の散布地とされている。今回調査した那賀城跡を含む那賀上台遺跡は縄文時代に加え奈良・平安時代の土器も確認した。また、鎌倉・室町時代の遺物から江戸時代の陶磁器も採集される。他の遺跡についても詳細な分布調査を行えば古墳時代から奈良・平安時代の遺跡が確認されるであろう。

	遺 跡 名	種 別	縄 文	弥 生	古 墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江 戸
1	那賀城跡	城館跡	○			○	○	○
2	川崎城跡	城館跡					○	
3	小瀬館跡	城館跡					○	
4	小瀬城跡	城館跡					○	
5	高館城跡	城館跡					○	
6	小舟城跡	城館跡					○	
7	包塚古墳	古墳			○			
8	門井遺跡	散布地						
9	陳向梶内遺跡	散布地	○					
10	那賀上台遺跡	散布地	○			○	○	
11	国長平遺跡	散布地	○					
12	堂ノ入遺跡	散布地	○					
13	川崎遺跡	散布地	○					
14	松原遺跡	散布地	○					
15	上ノ台遺跡	散布地	○					
16	本郷遺跡	散布地	○					
17	四方木平遺跡	散布地	○					
18	上の平遺跡	散布地	○					
19	豆入平遺跡	散布地	○					

第1表 周辺遺跡一覧

第4項 標準層序 (第2図)

現地表面からローム層上面までは北西隅で約45cm、南東隅で約80cmで、第2図は調査区南面のほぼ中央部の標準層序である。標準層序はIA、IB、IVA、IVB、V層で、II、III層は本遺跡では純層としては認められなかった。縄文時代の土坑はIVA層で確認出来、遺物は遺構確認面のIVA層上面とその上層から出土した。



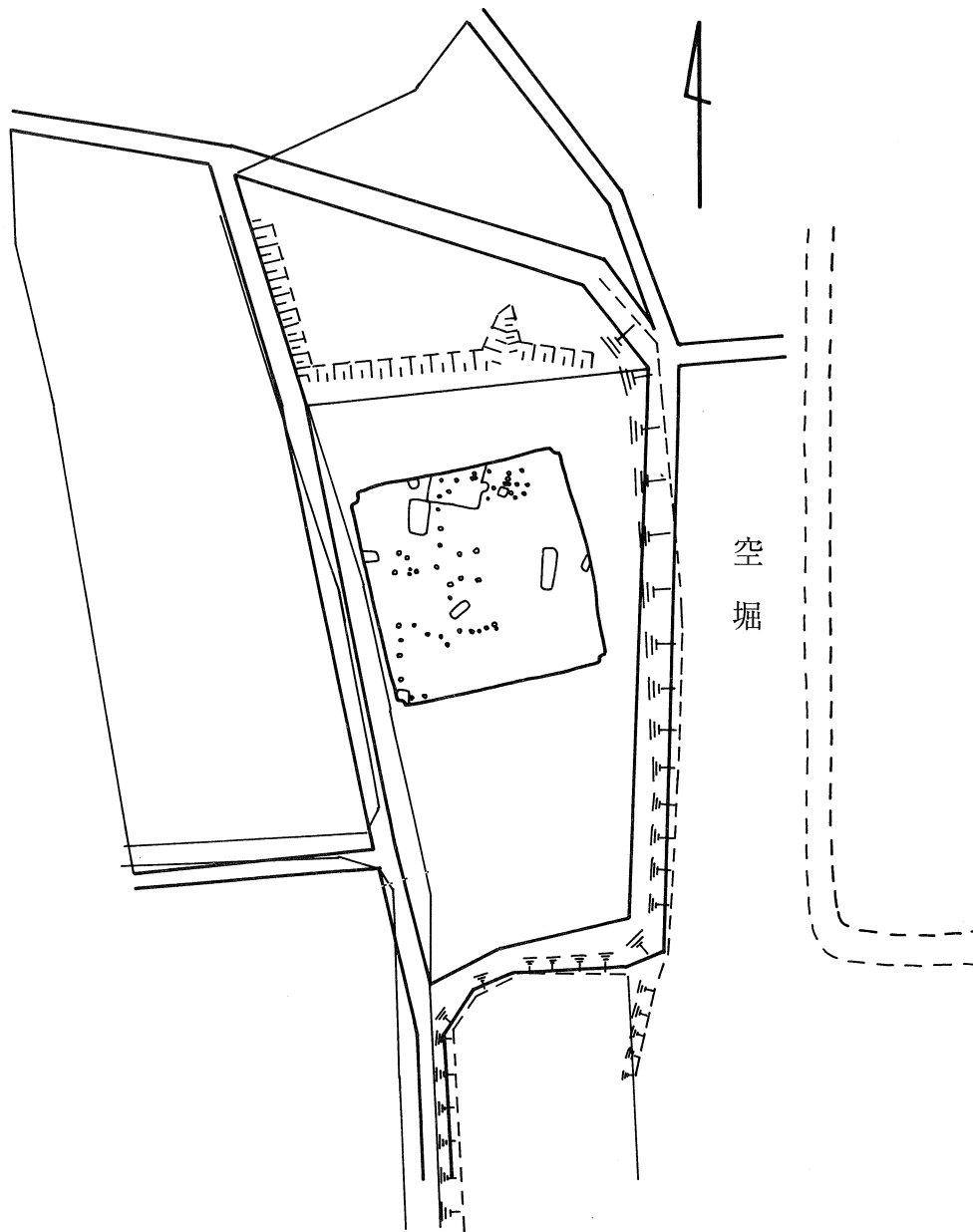
第2図 標準層序

- IA 表土層 (黒褐色土で砂質、根が多量にある)
- IB 旧表土 (黒褐色で砂質、根の量は少ない)
- IVA 黒色土 (多量の白色微砂粒を含む。縄文時代前期から中期以降であろう)
- IVB 黒褐色土 (いわゆるローム漸移層で黒色土にローム塊の混じりで白色砂粒多量に褐色粒多く含む)
- V 黄褐色土 (ハードローム)

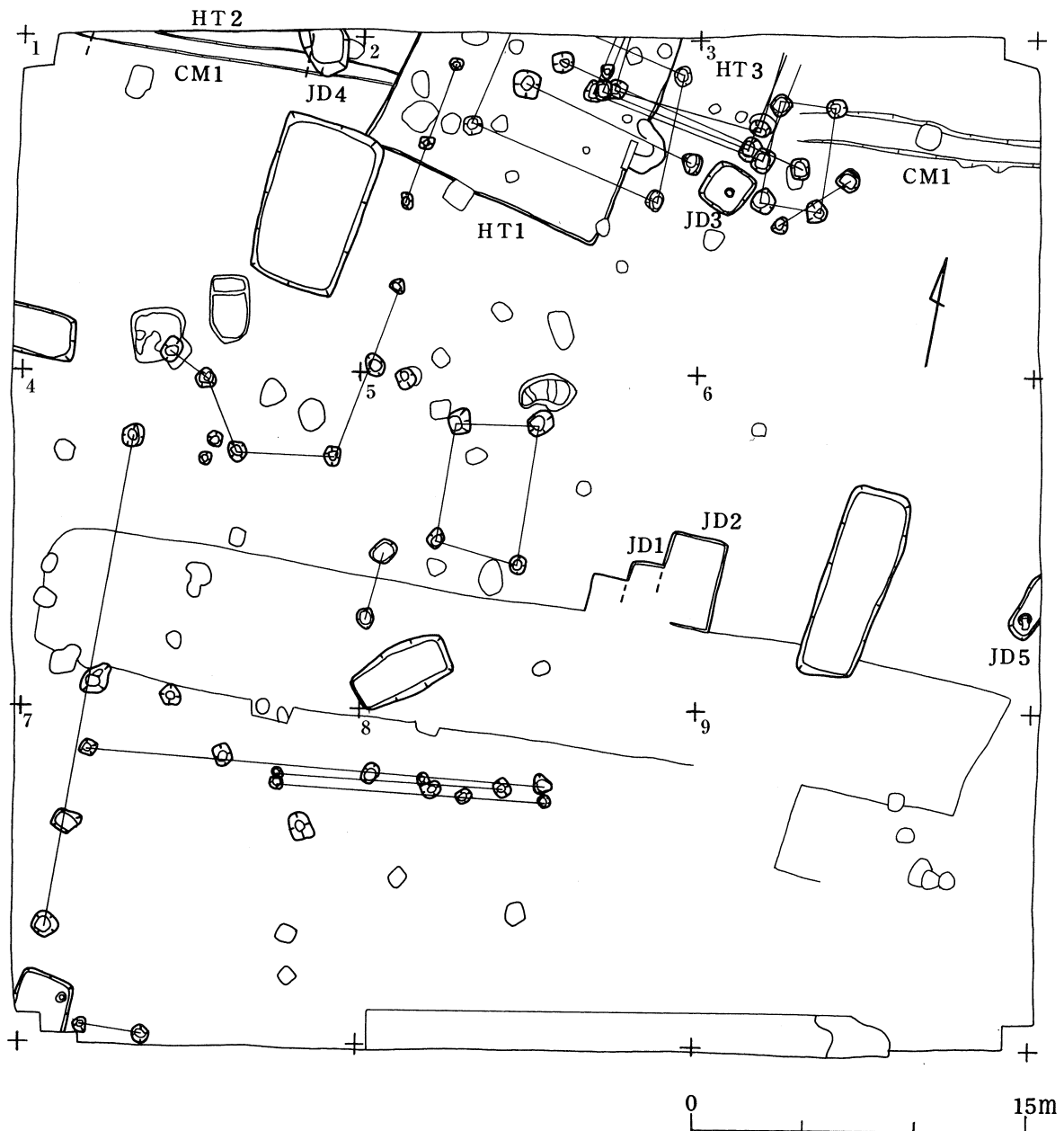
第2章 遺構と遺物

第1項 縄文時代

縄文時代の遺構はIVB層としたローム漸移層の平面確認では、IVA層とした黒色土に白色微砂粒を含み固く締っていた土の部分、落ち込みとしてとらえて掘下げてみたが、遺構と考えられるのは土坑3口(1~3号)のみであった。他は根痕、当時の地表面の凹凸によりシミ状に見えるものである。また、調査区内には風倒木痕といわれる、大木が倒れ中央のロームが盛り上がり、周囲に黒色土が落ち込み中に縄文土器が流入している穴跡があり、その上層から遺構が掘り込まれ、調査が難しい場合もあった。



第3図 調査範囲位置図(500分の1)



第4図 調査区全体図

土坑

土坑は3口（1号～5号のうち、4・5号は自然のシミと判断）確認した。

1号土坑（JD1）（第5図、図版3）

2号土坑と重複し、本跡が切られている。北辺と西辺の一部を確認した。西辺の外側は根痕と思われる。深さは約10cmである。埋積土は黒色土でローム粒を多く含んでいる。火熱を受けて割れた石が1点出土している。破碎焼礫剥片とする。

2号土坑（JD2）（第5図、図版3）

1号土坑と重複し、本跡が切っている。平面は東西80cm、南北130cm以上の南北軸の長方形である。深さは約10cmである。埋積土は黒色土でローム粒が少ない。破碎焼礫剥片が1点出土している。

3号土坑 (JD3) (第5図、図版3)

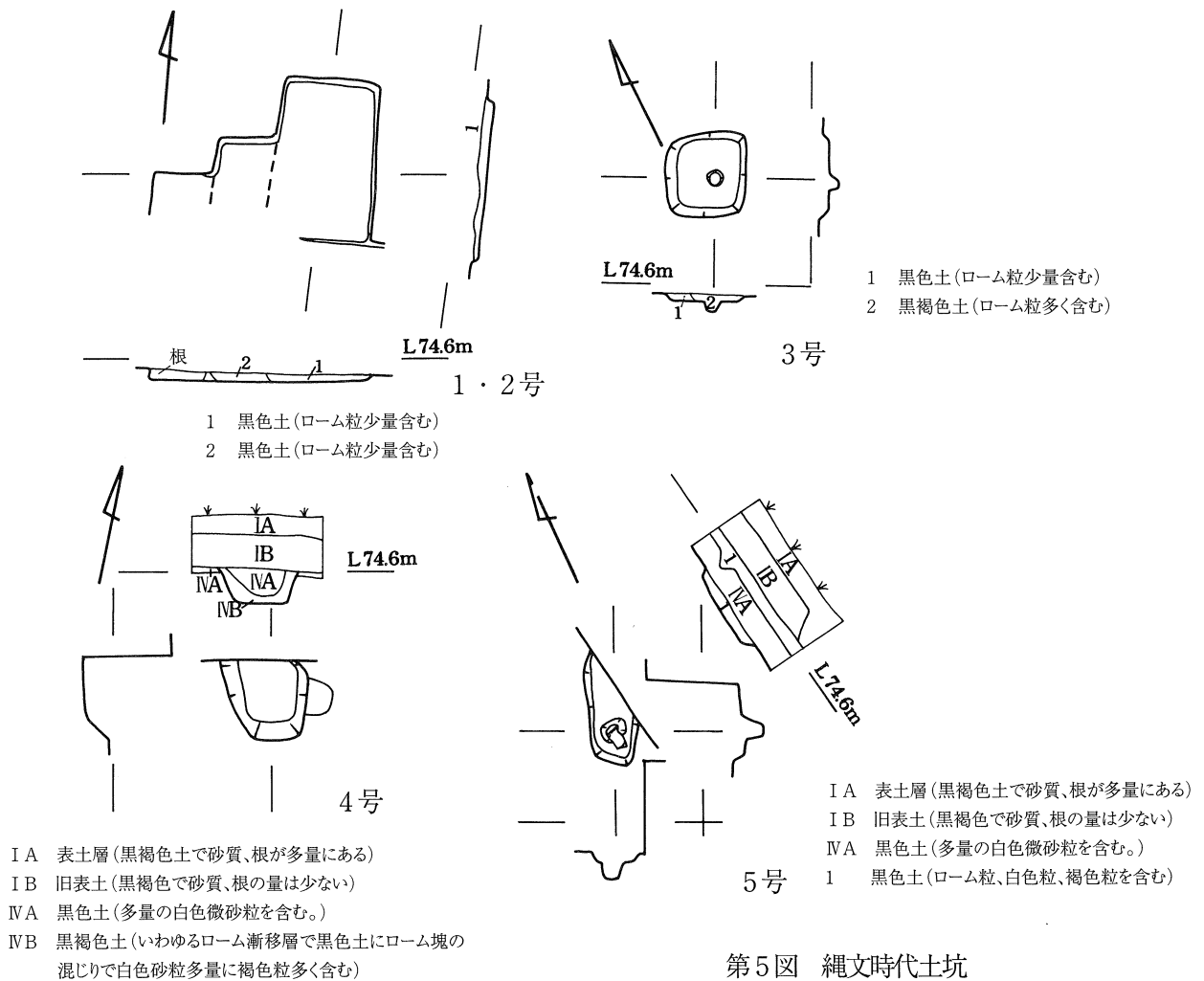
平面形は東西68cm、南北72cmの南北軸の方形である。深さは約8cmである。中央東寄りに径12cm、深さ約10cmの小穴がある。埋積土は黒色土でローム粒を多く含む。出土遺物は無い。

4号土坑 (JD4) (第5図)

調査区北壁下に確認したもので東西65cm、南北68cm以上、深さは約25cmである。土層はIVA層、IVB層がそのまま窪んでいる。遺構ではなく自然のシミと判断した。

5号土坑 (JD5) (第5図)

調査区東壁下に確認したもので東西40cm、南北90cm以上、深さは約10cmである。埋積土は黒色土でローム粒、白色粒、褐色粒を含む。IVA層、IVB層が乱れた土でIVA層に立ち上りが認められないことから、遺構ではなく自然のシミと判断した。



出土遺物

遺物は遺構確認面のIVA層上面とその上層から出土した。いわゆる遺物包含層の縄文式土器である。同層からは破碎焼礫も出土している。

そのことを確認するために南壁下にサブトレンチを設定し、IVB層のハードローム層まで掘り下げたところ、IVA層中から数点の縄文式土器と礫を確認した。

縄文式土器（第6図、図版5）

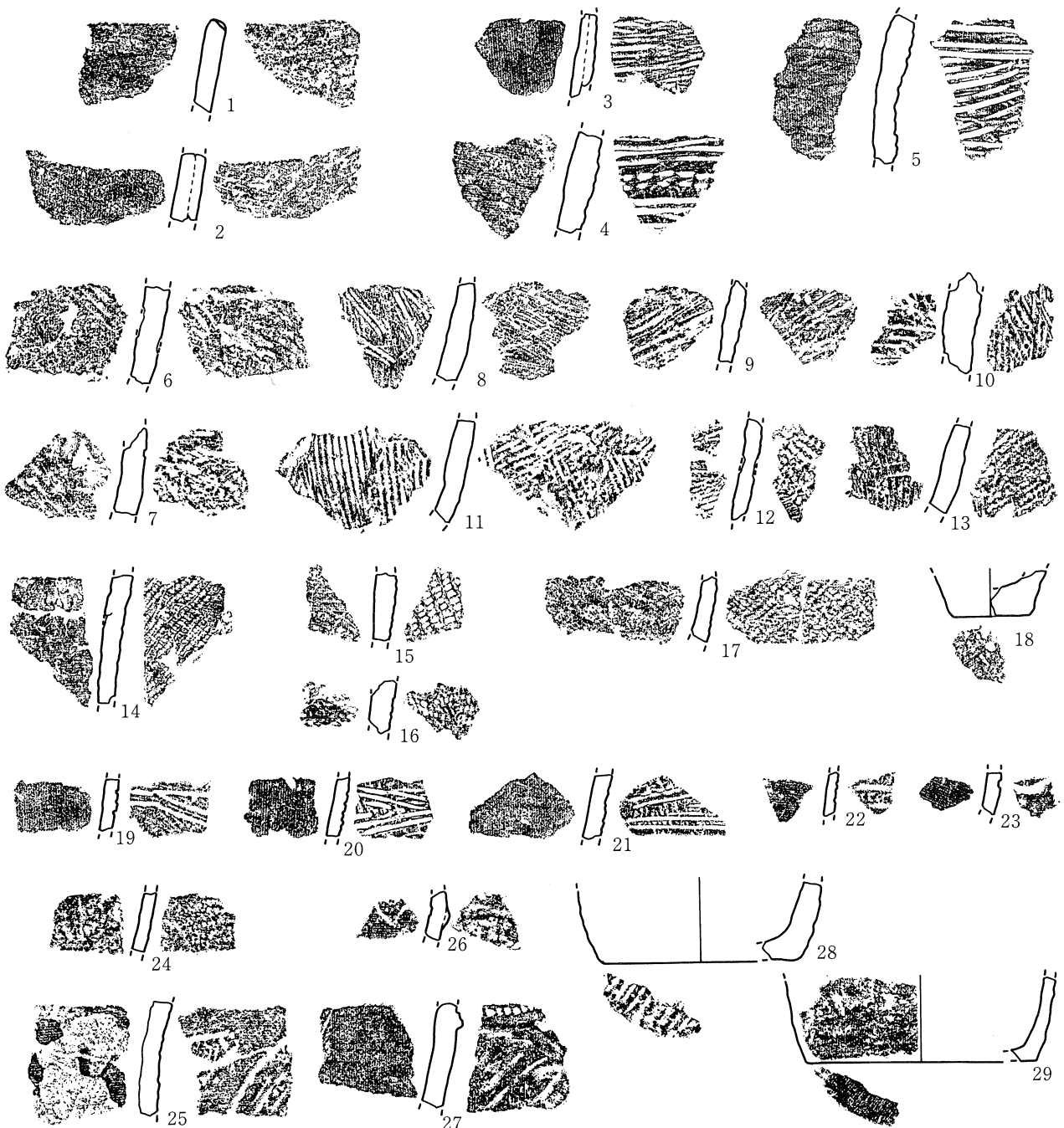
1は口辺部、2は体部片で、器面は荒れているが、同一個体で、早期の無文系土器であろう。

3は外面が条痕文、内面がミガキである。4は外面が上下に横方向の沈線を配し、中に横方向の烈点文を施文している。内面はヘラナデである。5は外面が横方向の沈線、内面が横方向のヘラナデである。

6～10は外面が斜方向のクシ目条痕、内面は斜方向のクシ目条痕仕上げで、6、7はその後、かるいナデを行っていると思われる。11は外面が斜方向のクシ目条痕を交差仕上げ。内面は縦に近いクシ目条痕仕上げで、内外面とも明瞭に残っている。底部近くと思われる。

12は外面に貝殻腹縁文に条線、内面はクシ目条痕仕上げ。13は外面に縄文、内面がクシ目条痕仕上げである条痕文系土器の一群である。6～13には繊維が含まれている。

14～17は外面が縄文、内面はナデ仕上げで繊維が含まれている。15にはヘラ状痕が見られる。18は



第6図 縄文式土器

この群の底部片と思われる。

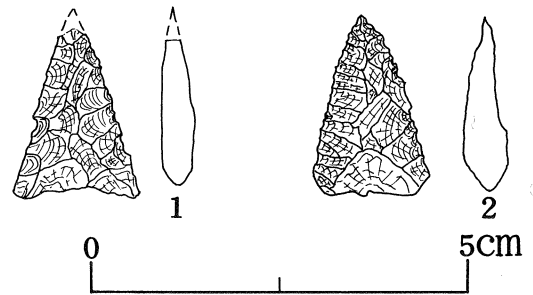
19～21は横方向、斜方向の沈線によって区画し、中に烈点文を配している。22、23も同類と思われる。24は外面に縄文を施文しており、同時期と思われる。

25～27は細紐を三角形状に貼り付けて楕円形に区画し、周辺に三角形または角形に連続して刺突した一群である。28、29は底部片であるが、この一群の底部と思われる。

これらの縄文式土器は、8、21、27が1区のCD1（中世土坑）の覆土中から、17が2区のHT1の床下、6が2区の小穴から、23が根痕から出土した。また、22が4区の根痕から、24、26が7区の小穴から、1、2、11が8区の遺構確認面から、18は8区のサブトレIVB層から出土した。10、13、14、15は5区から、12は9区から、28は4区の遺構確認面から、3、4、5、7、9、15、16、19、20、29が調査区内より出土した。

石製品（第7図、図版5）

1、2はチャート製の石鏃で、1は2区のHT1住居内の貼床の下から、2はCD5の埋積土から出土した。



第7図 石鏃（原寸）

第2項 奈良・平安時代

第1節 竪穴式住居跡

奈良・平安時代の竪穴式住居跡を3軒確認した。中世段階の整地のため、遺存状態は良くない。僅かに床面の一部が遺存している1号住居跡と土層断面で確認した2号住居跡と柱穴の配列から推定される3号住居跡である。

1号住居跡（HT1）

遺構（第8図、図版1）

住居跡の3分の1が調査区北壁の外にある。平面形は東西374cm、南北338cm以上の方形である。東カマドで主軸はE-15° 30' -Sである。壁の高さは2～6cm程である。床は、西側3分の2はローム層を床とし、東側3分の1はロームに黒色土を混ぜた貼床である。カマドは外幅74cm、壁外へ45cm、深さ20cm程で逆U字状に掘り込み、そこに基底の左と右に、黒色土にローム粒と焼土を混ぜた幅20cmのカマドの両袖を構築している。カマドの内幅は30cm程と推定される。袖は壁から住居内に約10cm入っている。柱穴は中世の小穴や根痕等が混在していたが、南西隅の柱穴が貼床を除去しても確認出来ないこと、柱穴の埋積土、深さから判断して東側の柱穴は東カマド壁外の小穴とした。柱穴間は東西300cm、南北195cmである。径は28～30cm、深さは36～40cmである。

遺構（第9図、図版5・6）

遺物はカマド右袖前方から土師器の甕（3）、埴（2）、カマド内の左右壁から土師器の高台付坏（1）が出土している。

1は高台付坏で、ロクロ土師器である。底部から内湾し、口辺部が外反する。底部外面は回転ヘラ削りで高台部は欠損している。胎土はやや砂質土で雲母を含んでいる。内面は黒褐色で黒色処理、外面は茶褐色である。口径13.5cm、底径7.7cm、現存高5.2cmである。2はロクロ土師器の埴で高台付と思われる。内湾し、口辺部からわずかに外反する。茶色、白色、微砂粒を含む。口径16.6cmである。3は土師器甕である。最大径が口辺部にあり、外反し、寸胴形である。胎土は砂質土で、外面に粘土の付着が見られ、カマドに掛けられていたものである。口辺部内外面はヨコナデ、外面は縦ヘラ削り、内面は横ヘラナデである。

これらの一群は須恵器生産が終了した段階のものであるが、1の底部の切り離し仕上げに須恵器工人の伝統を

引き継いでいるように思える。

2号住居跡 (HT 2)

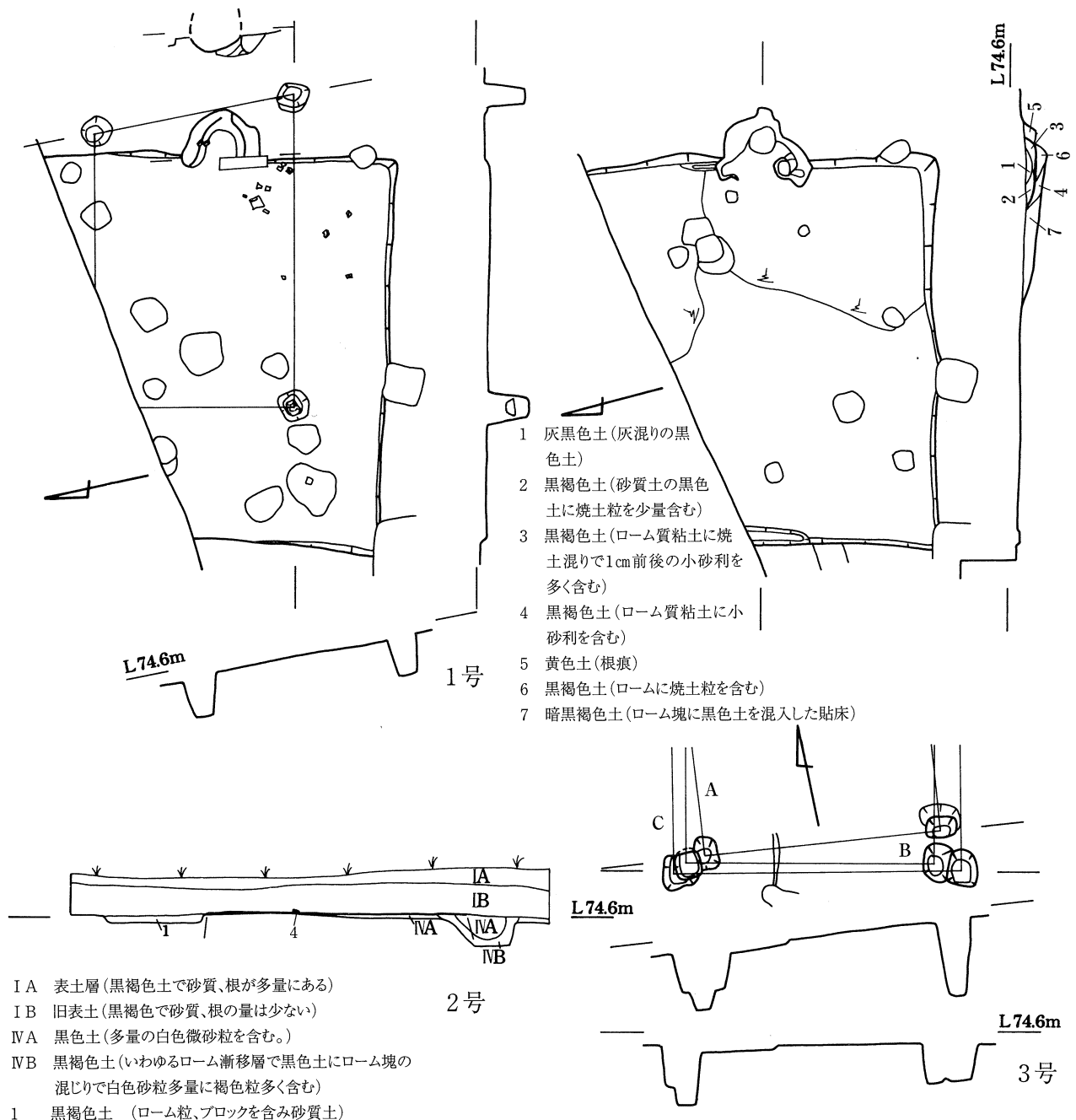
遺構 (第8図、図版2)

調査区内北壁の1号住居跡西側の土層断面で確認した。遺構確認面のローム層を床としている。中世の切土整地により上面が失われている。床は土層断面に東西2.5m遺存し、調査区内に柱穴が確認されないことから、住居跡の端の部分と考えられる。

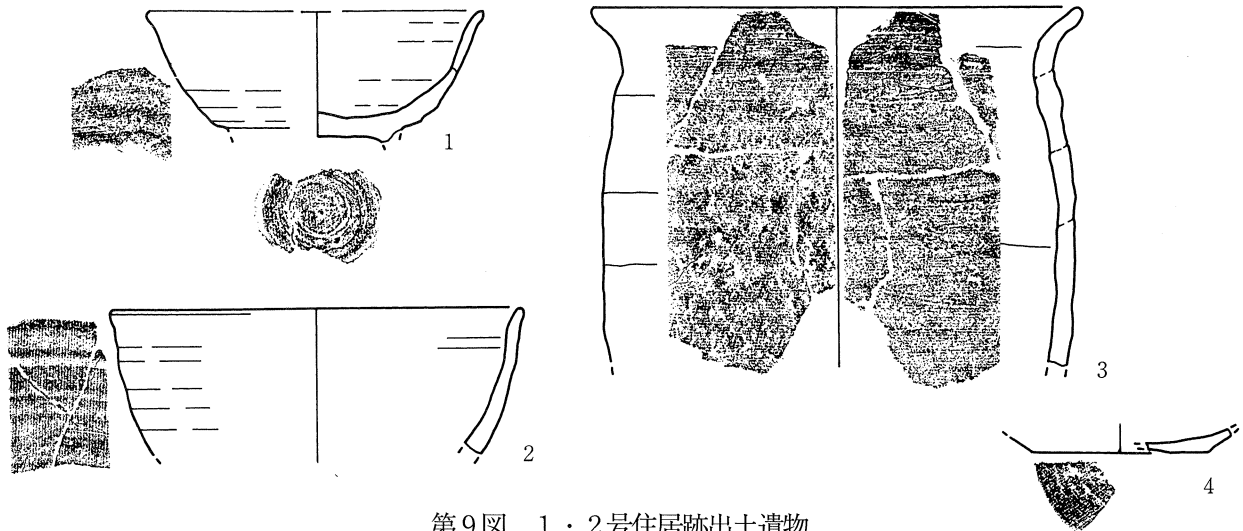
遺物 (第9図、図版5)

遺物は断面の床面上から、土師器坏の小片が出土している。

4はロクロ土師器の底部片で底部切り離しはヘラ切りである。底部の切り離し仕上げに須恵器工人の伝統を引き継いでいるように思える。



第8図 竪穴式住居跡



第9図 1・2号住居跡出土遺物

3号住居跡 (HT3)

遺構 (第8図、図版1)

壁、床とも失われ、柱穴2口を確認した。1号住居跡と重複し、1号住居跡の貼床を除去した後確認できたことから、1号住居跡より古い。小穴3口が重複し、土層観察からA→B→Cと2度建替えられていることが確認出来た。その東側に同規模の小穴3口が確認されたことから、住居跡の柱穴と判断した。径は25～38cm、深さは38～66cmである。柱穴間の距離は3 A号住居が228cm、3 B号住居が228cm、3 C号住居が270cmである。北側の柱穴は調査区外である。

出土遺物はない。

第3項 鎌倉・室町時代

土坑5口と多くの小穴群を確認した。(第10図)

小穴群は掘立柱建物跡2棟と柱列(建替えを含めて11棟)を想定した。

第1節 土坑

土坑5口を確認した。

1号土坑 (CD1) (第11図、図版2)

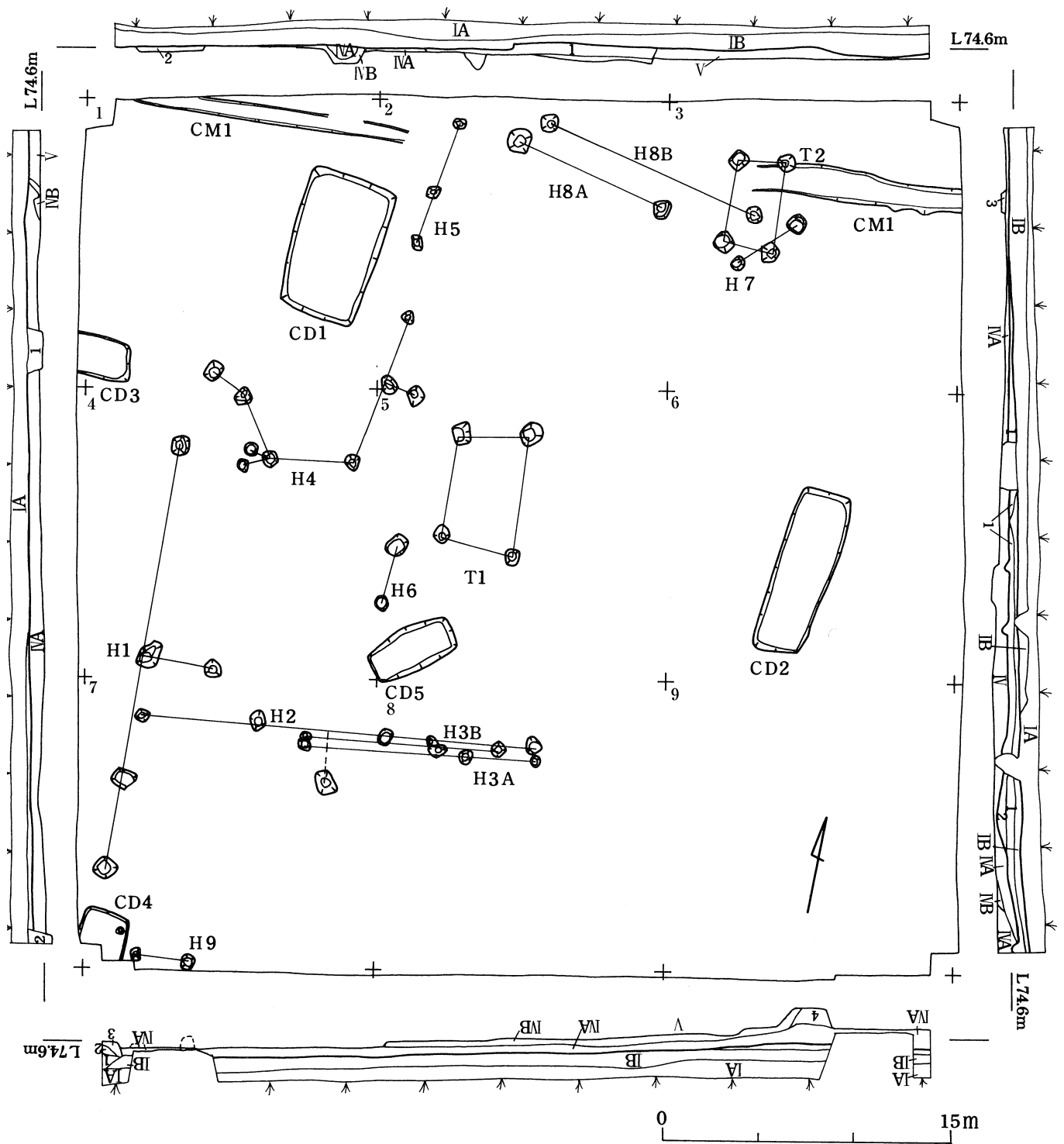
平面形は東西北辺で150cm、南辺で130cm、南北250cmの長方形で、主軸はN-12°-Eである。壁は外傾して立ち上り、深さは約50cmである。底面には径8cmの小穴があるが、根痕かも知れない。埋積土は黒色土にロームブロックを多量に含む茶褐色土で、北側から人為的に埋められたように推定される。

遺物は遺構確認面の南東隅から瀬戸焼の縁釉小皿(第15図8)が出土している。時期は15世紀中頃と推定される。埋積土中から縄文時代早期の条痕文系、前期の羽状縄文系、中期初頭の阿玉台系土器が出土している。

2号土坑 (CD2) (第11図、図版2)

平面形は東西88～98cm、南北285～295cmの長方形で、主軸はN-7°-Eである。壁は外傾して立ち上り、深さは約30cmである。埋積土は黒色土にロームブロック、ローム粒を多量に含む褐色土で、北から埋っている。

遺物は土師器の内黒土器の坏小片2点(第15図5・7)が出土している。



第10図 鎌倉・室町時代全体図

標準層序

- I A表土層(黒褐色土で砂質、根が多量にある)
 - I B旧表土(黒褐色で砂質、根の量は少ない)
 - IV A黒色土(多量の白色微砂粒を含む。)
 - IV B黒褐色土(いわゆるローム漸移層で黒色土にローム塊の混じりで白色砂粒多量に褐色粒多く含む)
 - V 黄褐色土(ハードローム)
- 北面土層
- 1 黒褐色土(褐色粒、白色粒を含む)
 - 2 黒褐色土(ローム粒、ブロックを含む砂質土)

南面土層

- 1 黒色土(褐色粒を僅かに含む)
- 2 黒色土(褐色粒を多く含む)
- 3 黒色土(褐色粒が少なく砂質)
- 4 黒褐色土(ローム粒、ブロックを含む砂質土)

東壁面土層

- 1 淡褐色土(ローム粒を多量に含む、客土された整地層と考えられる)
- 2 黒褐色土(ローム粒、ローム塊に黒色土の混じり、客土された整地層)
- 3 黒褐色土(ローム粒、ブロックを含む砂質土)

西面土層

- 1 黒色土(褐色土を僅かに含む砂質)

3号土坑（CD3）（第11図、図版2）

調査区西壁の北方に確認した。西半分は調査区外である。平面形は南北80cm、東西90cm以上の長方形と推定される。壁は外傾して立ち上り、深さは30cmであるが上方は削平されている。東西の主軸はE-5°-Sである。埋積土は褐色粒を僅かに含む黒色土の単一層で砂質である。

遺物は遺構確認面より中世土師質土器（瓦質）（第15図3）の内耳土鍋の小片が出土している。

4号土坑（CD4）（第11図、図版2・3）

調査区の南西隅に確認した。南半分は調査区外である。平面形は東西80cm、南北80cm以上の長方形と推定される。壁は外傾して立ち上り、深さは約20cmである。南北の主軸は磁北の北である。埋積土は褐色微砂粒、白色微砂粒、ローム粒を含む黒色土の砂質土である。出土遺物はない。

5号土坑（CD5）（第11図、図版3）

平面形は南北方向の東辺で56cm、西辺で50cm、中程で80cm、東西150cmの長方形で、南北の中程が崩れている。底面は東西136cm、南北50cmである。壁は外傾して立ち上り、深さは110cmである。主軸はN-51°-Eである。埋積土は大きく1～3層、4～6層、7～10層の3時期に分けられる。共にロームブロック、ローム粒、黒色土の混入割合によって、1～3層は褐色土から黒褐色土、4～6層は黒色土から黒褐色土、7～10層は褐色土から黄褐色土である。これは構築後なんらかの施設に使用し自然埋没後、6層まで掘下げ西方から人為的に埋め戻し、4層上面からは東方から埋め戻している。

遺物は縄文土器片、石鏃が出土しているが中世遺構である。

第2節 小穴群

多くの小穴を確認したが、この中には柱穴もあると思われるが、根痕やシミ、時代も縄文時代早・前期のものから中世から近世のものまで含まれている可能性がある。建物としては捉えられない。

これらは従来、小穴（ピット）群などとしてあつかわれていたが、本調査では小穴の形、埋積土、底面の黒色化した硬化面を柱当りと判断した。小穴の形は、古代のものは円形、中世のものは隅丸方形、埋積土は古代のものは黒色土で硬い、中世のものは灰褐色で砂質のもの、淡褐色でやや軟らかいものがある。柱当りは古代のものはやや不明瞭、中世のものは黒色硬化している。さらに深さなどは古代のものは深く、中世のものは砂質のものは浅く、やや軟らかいものはやや深い。さらに少量であるが柱穴から中世の遺物が出土している。これらの状況をふまえて、中世から近世と推定されるものを抽出し、掘立柱建物と柱列を想定してみた。

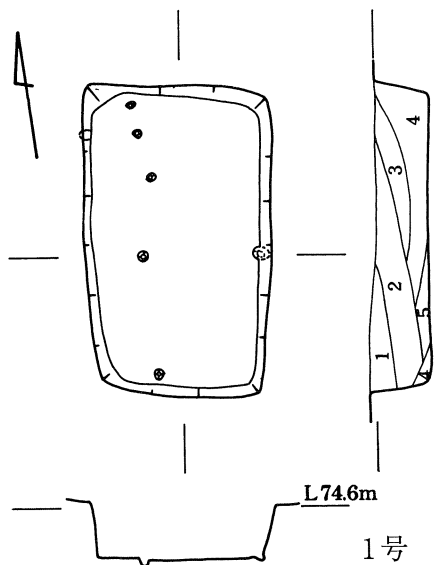
掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は2棟確認した。

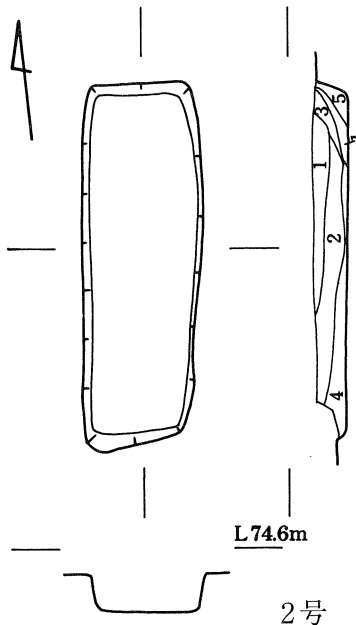
1号掘立柱建物跡（T1）（第12図、図版3）

平面形は1間×1間の南北棟で、主軸はN-2°-Eである。柱間寸法は東西南辺で128cm、北辺で124cm、南北西辺で180cm、東辺で210cmである。柱穴は24×26cm～30×36cmの不整形で、深さは28～36cmである。

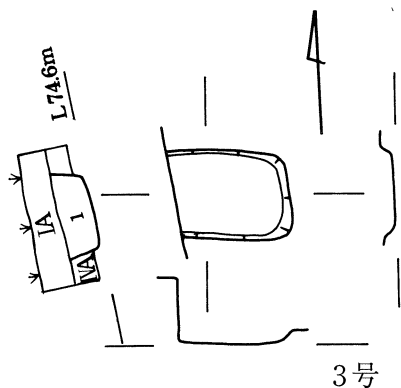
遺物の出土はない。



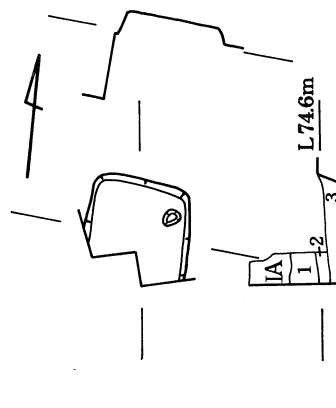
- 1 黒褐色土(黒色土・ローム粒の混じり)
- 2 黒褐色土(黒色土主体に2cm大のロームを含む)
- 3 黒色土(ローム塊、ローム粒を含む)
- 4 黒色土(黒色土主体に5cm大のローム塊を3個含む)
- 5 黒褐色土(ローム粒主体に黒色土を含む)



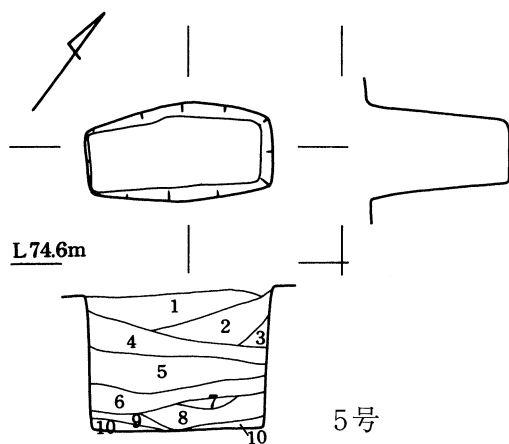
- 1 黒褐色土(3mm以下のローム粒、黒色粒の混じり)
- 2 黒褐色土(2~3cm大のローム粒、1cm大の黒色土の混じり)
- 3 黒褐色土(1に類似するが量が少ない)
- 4 黒色土(ローム粒少なく、黒色土が主体)
- 5 黒色土(黒色土に2cm大のローム粒が混じる)



- IA 表土層(黒褐色で砂質、根子が多量にある)
 IVA 黒色土(多量の白色粒微砂粒を含む)
 1 黒色土(褐色土を僅かに含み砂質)



- IA 表土層(黒褐色で砂質、根が多量にある)
 1 黒色土(褐色粒少なく砂質)
 2 黒色土(褐色粒、白色微砂粒を含む)
 3 黒色土(ローム粒を含む、やや砂質)

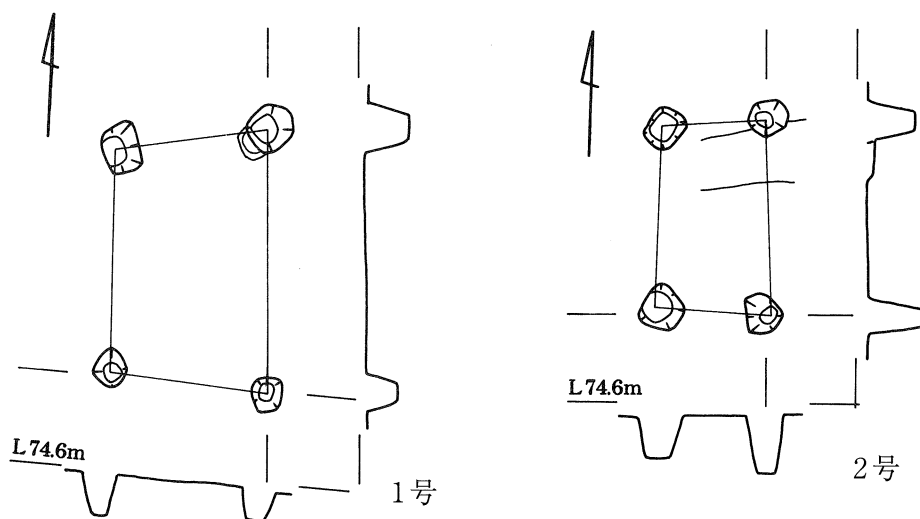


- 1 褐色土(ローム粒主体に黒色土少量)
- 2 黒褐色土(黒色土にローム粒を含む)
- 3 褐色土(ロームブロックに黒色土少量、壁の崩れ)
- 4 黒褐色土(ローム粒と黒色土が半々に混じる)
- 5 黒色土(黒色土にローム粒がまばらに入る)
- 6 黒色土(5に類似する)
- 7 褐色土(ローム粒を多量に含む)
- 8 黒褐色土(ローム粒が多く粘質)
- 9 黒色土(6に類似する)
- 10 黄褐色土(ローム塊、壁の崩れ)

第11図 中世土坑

2号掘立柱建物跡 (T 2) (第12図、図版3)

平面形は1間×1間の南北棟で、主軸はN-2°-Eである。柱間寸法は東西南辺で94cm、北辺で92cm、南北西辺で146cm、東辺で156cmである。柱穴寸法は28×32cm~32×34cmの不整形で深さは35~48cmである。遺物は縄文時代早・前期の破碎焼礫小片が出土している。



第12図 掘立柱建物跡

柱列

東西に並ぶもの、南北に並ぶもの、コの字に連結しているものなど、建替えを含めて11棟を想定した。

1号柱列 (H 1) (第13図)

4口の柱穴が南北に並ぶ。北から2口目が失われていると推定されることから5口以上と思われる。主軸は磁北の北である。柱間寸法は南から160cm、210cm、370cmであるが、推定柱穴を想定すると370cmは210cmと160cmとなる。総長740cmである。平面形は28×32cm~32×34cmの不整形で、深さは確認面から18~32cmであるが標高はほぼ同じである。埋積土は砂質である。

出土遺物はない。

2号柱列 (H 2) (第13図)

4口の柱穴が東西に並び、西から1・2口目の中程北方90cmの位置に控柱がある。西に延び4口以上の可能性もある。主軸はE-5°30'-Nである。柱間寸法は西から210cm、210cm、260cmである。総長680cmであるが、西へ1間の260cm延びる可能性もある。平面形は方22cm~20×28cmの不整形である。深さは12~18cmと浅く、埋積土は砂質である。控柱のみ30cmと深い。

遺物は西から2口目から縄文土器片、3口目から中世土師質土器の土鍋片が出土している。

3A号柱列 (H 3 A) (第13図)

3口の柱穴が東西に並ぶ。西の柱穴から40cm東の南方60cmに控柱がある。主軸はE-7°-Nである。柱間寸法は西から280cm、120cmである。平面形は16×18cm~20×25cmの不整形で、深さは西から10cm、36cm、21cmである。控柱は34×40cmの長方形で、深さは41cmである。埋積土は砂質である。

遺物は西の柱穴から古代の土師器坏の小片、東の柱穴から中世土師質土器の土鍋(第15図1)が出土している。

3 B号柱列 (H 3 B) (第13図)

3 A号と同形態で3口が東西に並ぶ。3 B号から3 A号への建替えと推定される。控柱は同じものを使用した。主軸はE-6° -Nである。柱間寸法は西から230cm、104cmである。平面形は13×17cm~23×30cmの不整形で、深さは西から11cm、20cm、35cmである。埋積土は砂質である。

出土遺物はない。

4号柱列 (H 4) (第13図)

西側の3口と東側の3口が別とも考えられたが、コの字に連結しているものと想定した。西側の3口は中柱で西に屈曲している。柱間寸法は南から120cm、75cmである。主軸方位はN-44° -Wである。平面形は南2口が25×30cm、北端は28×35cmの不整形、深さは南から24、30、58cmで、北端が深い。北端の柱穴は控柱の可能性もある。また、南端の柱穴西側に径16×19cmで深さ18cm、径21×24cmで深さ16cmの小穴がある。控柱であろう。

東側の3口は南北に並び、柱間寸法は南から148cm、120cmである。主軸方位はN-9° -Eである。柱穴の平面形は不整形で、南から24×28cmで深さ29cm、24×32cmで深さ27cm、18×24cmで深さ27cmである。中柱から東の控柱は25×27cmで深さ46cmである。柱列の深さは27~29cmであるが、控柱は46cmと深い。西と東を結ぶ柱間寸法は144cmである。

遺物は西列北端の柱穴から縄文時代前期の土器と破碎焼礫が出土した。

5号柱列 (H 5) (第14図)

3口の柱穴が南北に並び、4号柱列の北方に位置する。主軸はN-9° -Wである。柱間寸法は南から92cm、126cmである。平面形は不整形で、規模は南から15×24cm、28×27cm、17×19cmで、深さは南から23cm、18cm、10cmと北が浅い。

6号柱列 (H 6) (第14図)

2口が南北に並ぶ、一間の柱列である。主軸はN-1° -Eである。柱間寸法は100cmである。柱穴の平面形は不整形で南側の柱穴は20×28cmで深さ29cm、北側の柱穴は20×28cmで深さは22cmであるが、遺構確認面から想定すると42cmになる。南側が深く、北側が浅い。

7号柱列 (H 7) (第14図)

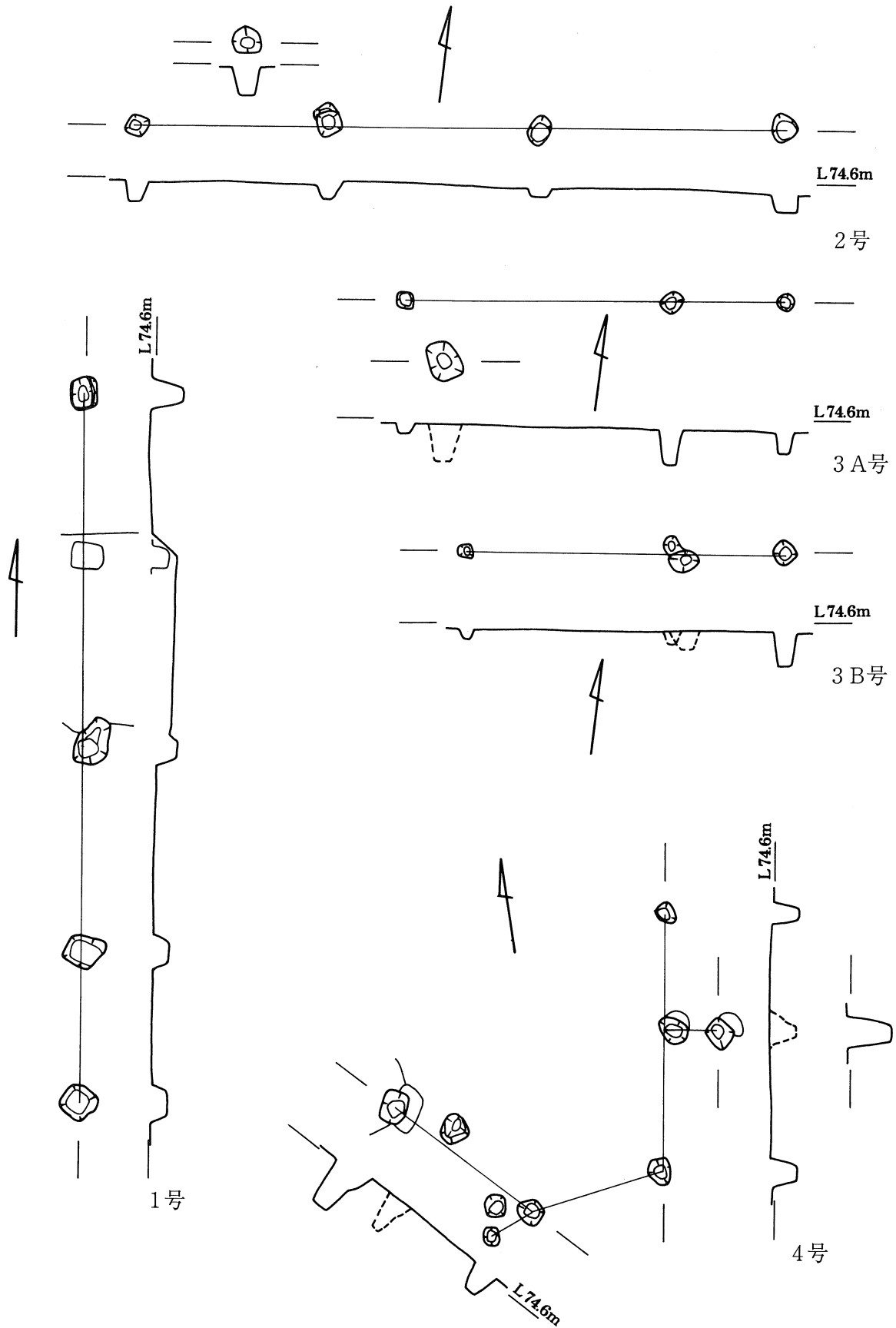
1号建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。2口が北西から南東方向に並び、柱間寸法は120cmである。主軸はN-45° -Eである。平面形は不整形で南側の柱穴は19×22cmで深さが17cm、北側の柱穴は28×32cmで深さは17cmである。深さは同じであるが、柱穴径は南が小さく、北が大きい。

8 A号柱列 (H 8 A) (第14図)

2口が東西方向に並び、柱間寸法は270cmである。主軸はN-75° -Wである。平面形は不整形で、東側の柱穴は28×32cmで深さが40cm、西側の柱穴は37×40cmで深さは47cmである。柱間寸法が長く、柱穴が深い。西の柱穴から中世土師質土器の土鍋(第15図2)が出土している。

8 B号柱列 (H 8 B) (第14図)

2口が東西方向に並び、柱間寸法は386cmである。主軸はN-74° -Nである。柱穴の平面形は不整形で、東

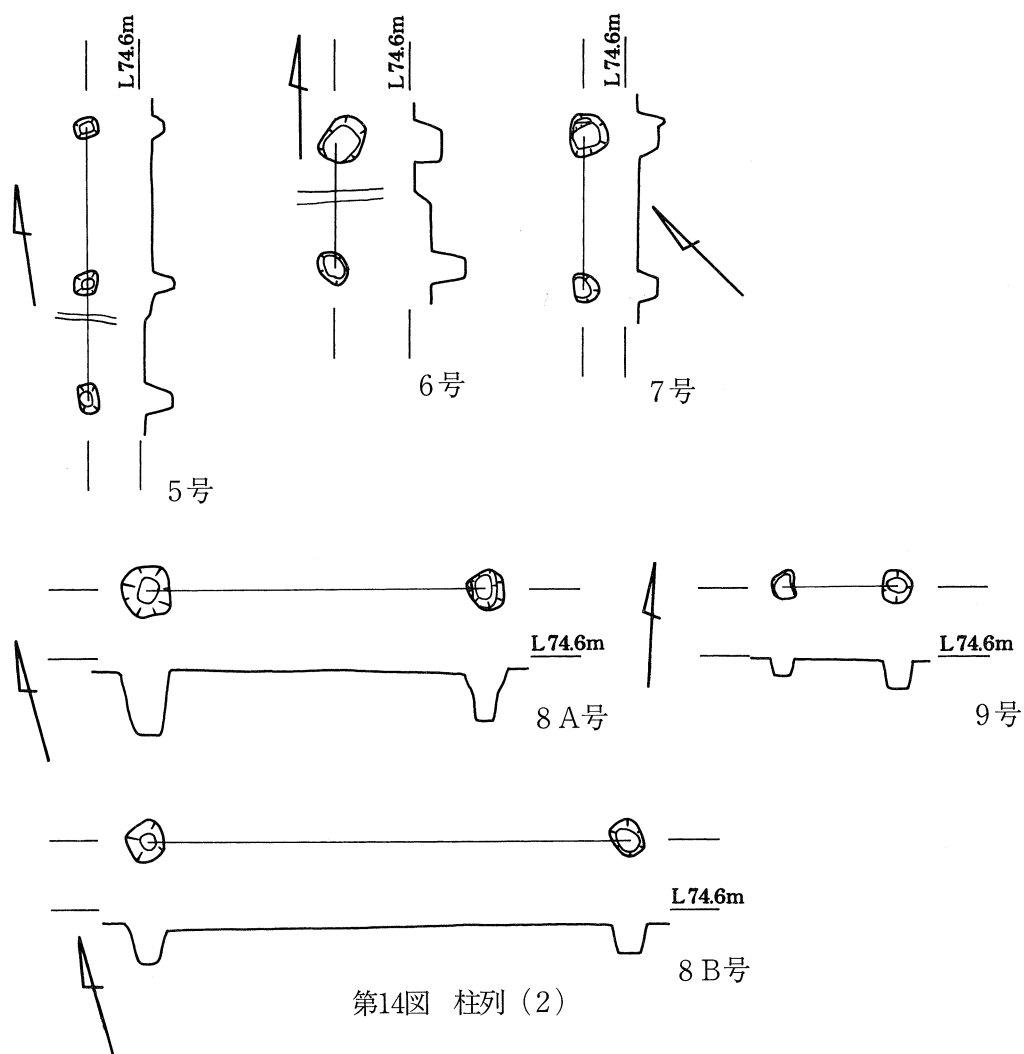


第13图 柱列 (1)

側の柱穴は24×29cmで深さは26cm、西側の柱穴は方29cmで、深さは31cmである。柱間寸法が最も長く、柱穴の深さもやや深い。

9号柱列 (H 9) (第14図)

2口が東西方向に並び、柱間寸法は90cmである。主軸はE-3°-Nである。柱穴の平面形は不整方向で、西側の柱穴は17×23cmで深さは11cm、東側の柱穴は22×25cmで深さは20cmである。埋積土は砂質である。柱穴は南側の調査区外に延び、柱穴4口の掘立柱式建物跡とも推定される。



中・近世出土遺物 (第15図、図版6)

1～4は土鍋の口辺部小片で中世ロクロ土師器である。1は蓋受部の位置で内外面に稜があり口縁部は丸みを帯びている。胎土に白色、赤色の微砂粒を含み、外面には煤が付着している。2は蓋受部の上下端に稜があり、蓋の固定を考えているものと思われる。口縁部は平に仕上げている。胎土に石英粒を含み、外面には煤が付着している。3は蓋受部で内外に稜を持ち、平坦な口縁に向け厚くなり、体部は薄く仕上げている。胎土は石英、金雲母を含み、外面には煤が付着している。4は口辺部のみで、口縁は平に仕上げている。胎土に白色粒、雲母を含み、外面には煤が付着している。

5・7は土師器の坏・壺で、内面が黒色処理されている。古代末の可能性もあるが、中世瓦質土器と判断した。6は中世土師器の壺である。8は口辺部内外面に灰釉を施釉した、いわゆる縁釉小皿で瀬戸焼である。15世紀中

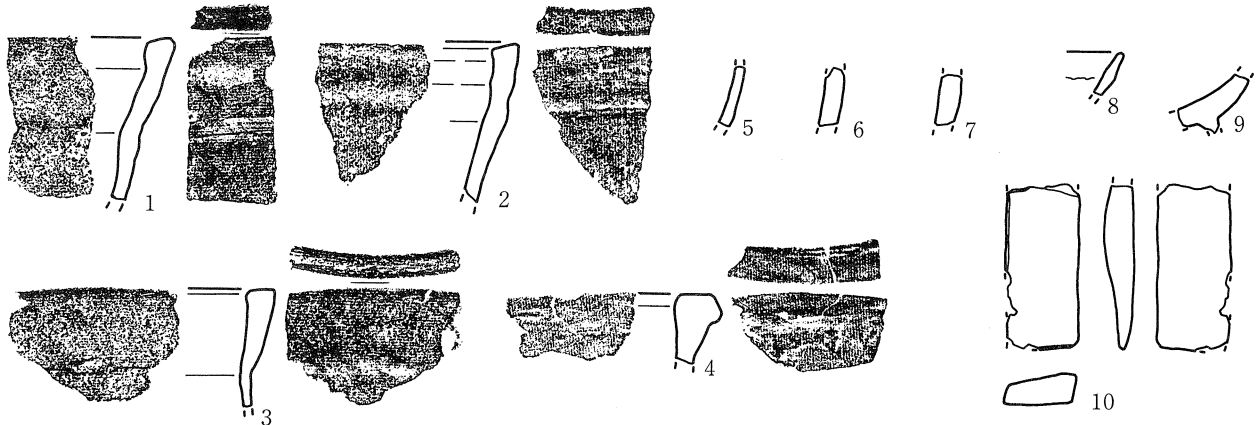
頃であろう。

9は高台付碗で砂質で灰色の土灰釉が施された近世の肥前唐津焼であろう。

10は石製の砥石で、四面に滑沢な使用痕がある。

これらの遺物は1が8区のH3A小穴、2が2区のH8A小穴、3が1区のCD3、4が7区の確認面、5・7が6区のCD2、8が1区のCD1、10が2区のH5、6・9が調査区内から出土した。

出土した遺物の時期は大半が14、15世紀であるが、4の土鍋は織豊期、9の唐津焼の碗は近世江戸期のものである。



第15図 中・近世出土遺物

第3章 まとめ

今回の調査は15×15mの225m²という、少ない調査面積であったが多くの成果が得られた。遺跡としては那賀城として調査を行ったが、実際は広大な那賀上台遺跡に含まれている。東半の台地縁辺部が那賀城跡と推定される。確認した遺構は縄文時代、平安時代、室町時代から戦国時代と考えられる。また、遺構は認められなかったが縄文時代早期・前期・中期の土器、江戸時代の陶磁器などが出土した。

第1項 縄文時代

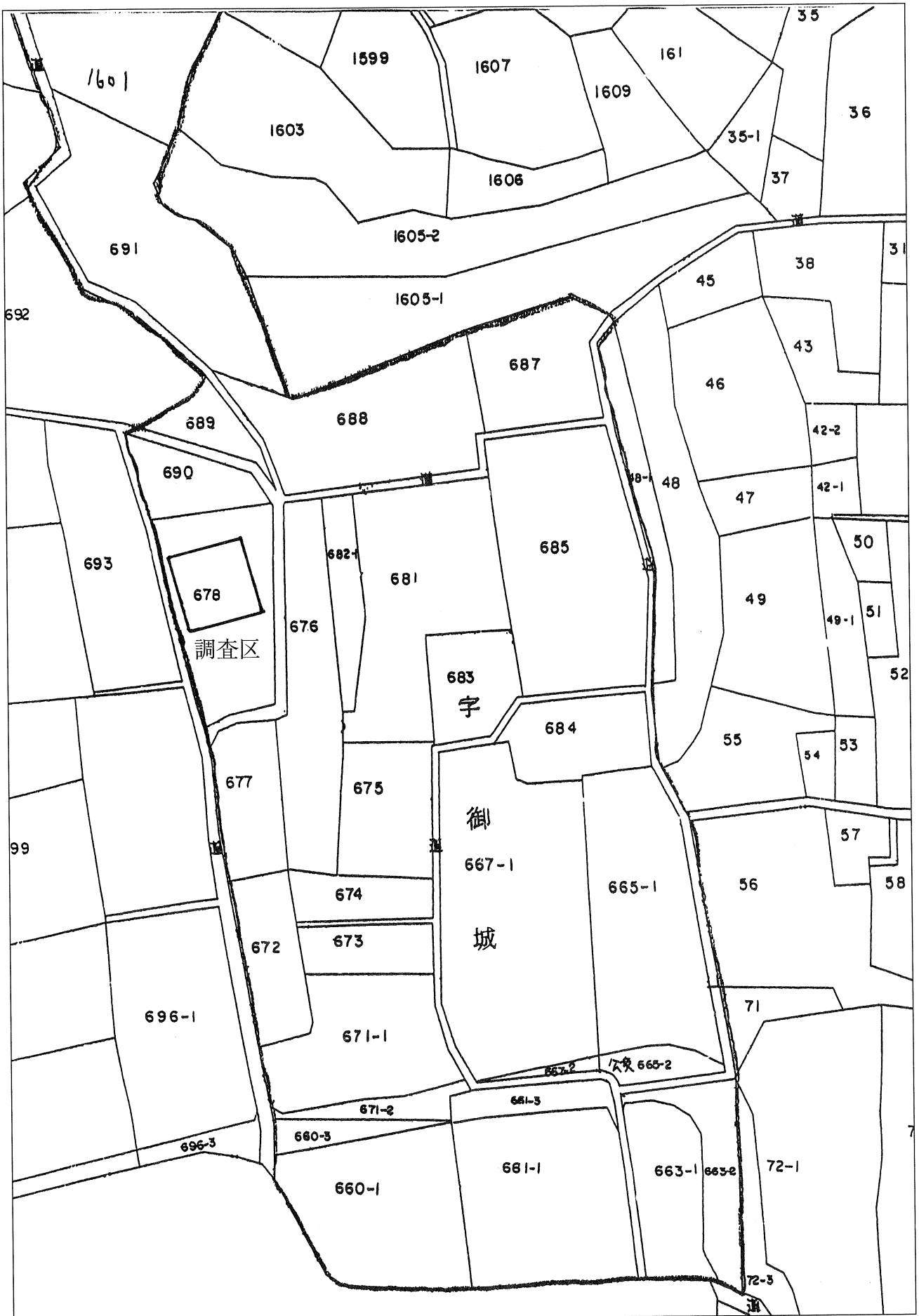
縄文時代の土器は早期の無文土器（1）、沈線文系の田戸下層式土器（3～5）、条痕文系の茅山下層式土器（6～11）、前期の多縄文系の花積下層式土器（12、13）、黒浜式土器（14～18）、竹管文系の諸磯式土器（19～23）、中期の阿玉台系土器（24～29）が出土している。早期の土器はIV A層としたローム漸移層から出土したが明確な遺構は確認できなかった。前期の土器も同様であったが、根痕や当時の地表面の窪みから出土するものが多かった。遺構として捉えられる土坑はJD1～3で、他は遺構ではないであろう。土坑の時期は明確ではないが中期初頭の阿玉台式期と考えられる。

第2項 平安時代

竪穴式住居跡を3軒確認した。平面形がわかるのは1号住居跡のみで2号住居は床面の断面、3号住居跡は柱穴から推定したものである。1号住居跡からは土師器の台付坏、甕形土器が出土している。台付坏は台部と口辺部を欠くが、高台で内面が磨かれている。甕は口辺の反りが少なく、2次火熱を受けておりカマドに使用されていたものと考えられる。土器の特徴から10世紀末から11世紀前半の時期と考えられる。

2号住居跡からも土師器の坏の底部片が出土している。小片であるが10世紀代のものと推定される。

今回の調査では中世段階の切土整地により削平されていたが、周辺には同時期の集落が形成されていること



第16図 地籍図

が予想される。

第3項 室町時代

遺構からの出土遺物は非常に少なく小片であるが、時期を考える為には貴重である。1号土坑からは瀬戸焼の縁釉小皿が出土し、15世紀中頃と考えられる。3号土坑からは中世土師質土器の内耳土鍋、2号柱列からは中世土師質土器片、3A号柱列からは中世土師質土器の土鍋が出土している。これらの遺物の時期はおおよそ15世紀代と推定されるもので確実に鎌倉時代と考えられるものはなかった。しかし、前述した掘立柱式建物2棟と9棟の柱列は中世の遺構と考えて良いであろう。

先にも記したように、今回調査した小穴（ピット）群は、2×3間、3×4間というような建物にはならなかった。遺構の特徴からどのように使用されたか考えてみる。

2棟の1間×1間の南北棟は規模は違うが、東側の柱間寸法より西側が短くなっている特徴がある。1・2号土坑にも同じ特徴が見られる。また、1・2・4号土坑は南北軸、3号土坑は東西軸である。1・2号建物は南北棟で規模も近い。このことから2棟の建物は居住施設と考えるより、地面を掘下げた土坑を地上に建てたものではないかと思われる。また埋積土から1・2号土坑と3・4号土坑は2時期に別けられる。5号土坑は深く軸線が違うことから時期が新しくなると思われる。

柱列は推定も含めて4間のもの（H1・2）、2間のもの（H3A・3B・5）、1間のもの（H6・7・8A・8B・9）、連結のもの（H4）がある。同形態の3A・3B号柱列、8A・8B号柱列の状況から2時期あることがわかる。また1・2・4号柱列のように規模の大きい施設には控柱が付いている。

第10図は中世遺構の全体図である。2時期ある柱列と土坑・建物の配置関係を見ると囲んでいるようにも思える。とすると土坑、建物とも貯蔵施設と考えられる。また、土坑・貯蔵建物と柱列の時期が異なると考えると、柱列は臨時的な防御施設とも考えられるが、今後の調査事例の増加によって再考したい。

第4項 那賀城跡の現況

那賀城跡は本調査区を含めた、字御城を中心に構成されているものと考えられる。御城北東隅を北急斜面から上幅12m、下幅9m、深さ2.5mの空堀を南に40m、東急斜面から同規模の空堀を西に20m構築している。これによって南北50m、東西40mの主郭を造り出している。この主郭は篠竹で覆われているが、小さな溝によって区画されている。調査区は南北空堀の北端西方上段に位置している。調査区の北に隣接して墓地がある。

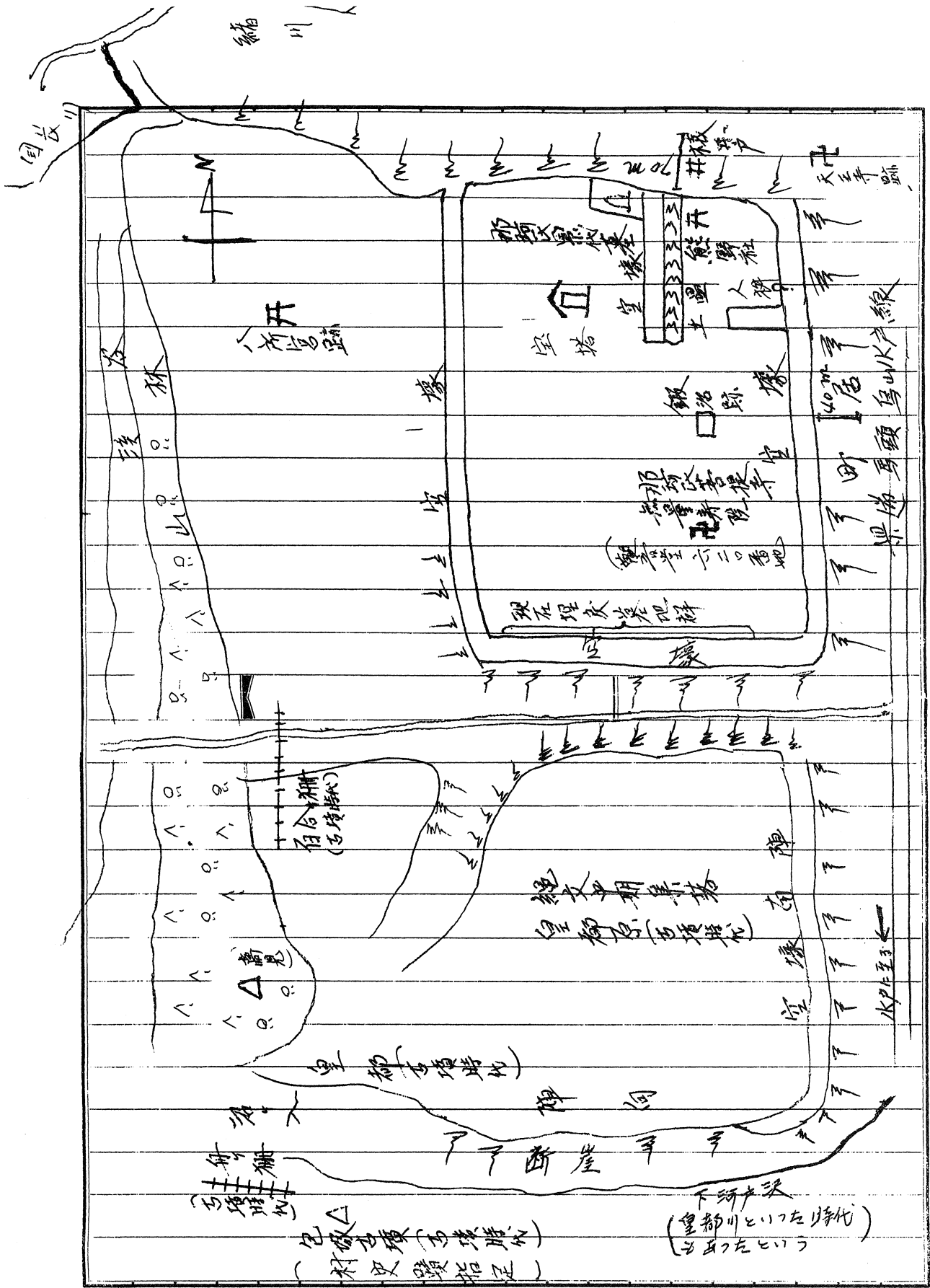
那賀城跡の全様については、第16図の地籍図、永年に涉って那賀城跡の研究を行ってきた、石川 豊氏の「皇都及び那賀城跡一覧」を那賀城跡全体推定図として第17図に掲載した。さらに、現在の地形図に小字名を重ね合せたのが第18図である。

石川氏によると

昭和40年代までは空堀あるいは、土塁の一部も遺存していたとのことである。その範囲は小字御城・宝堂・観音堂地区で、東西200m、南北400mである。

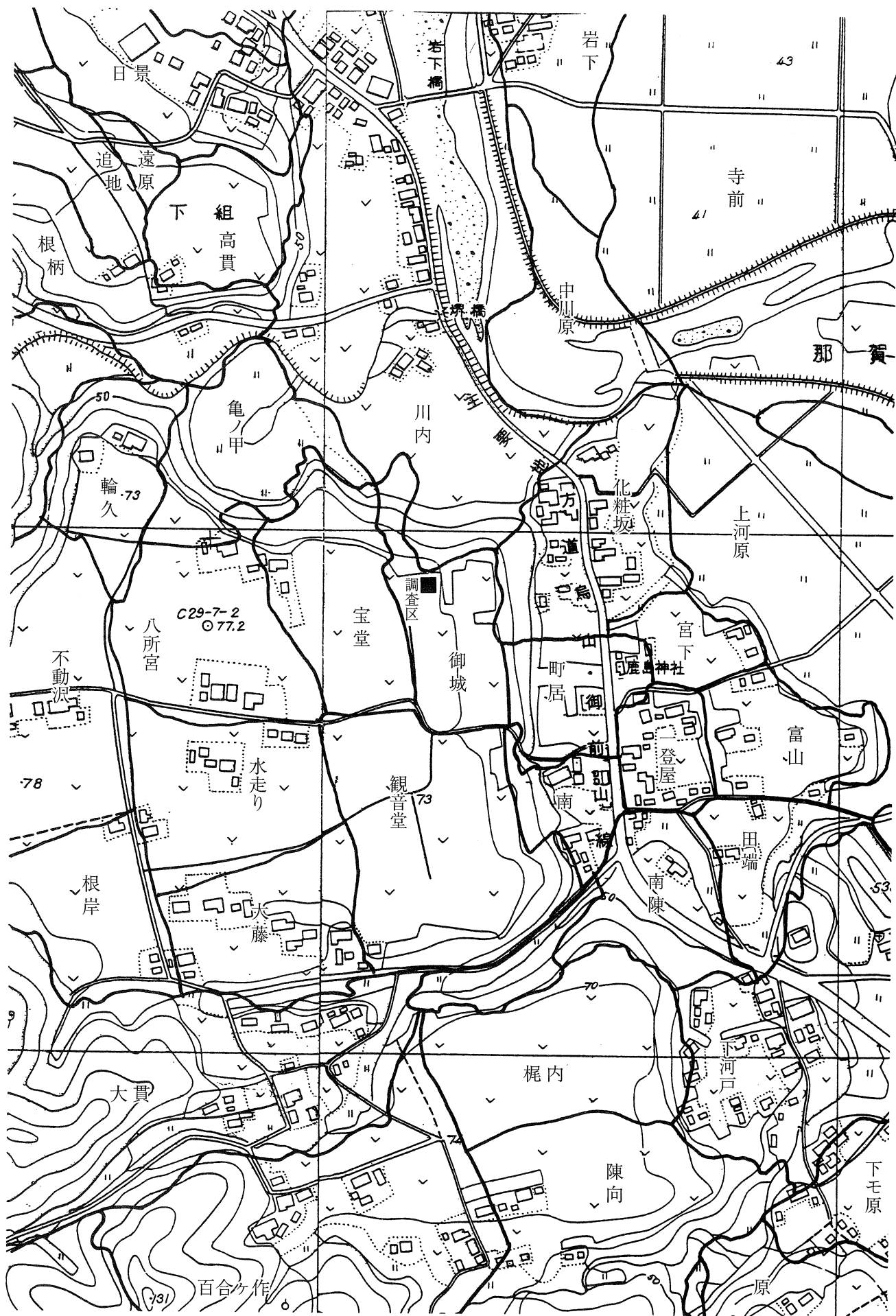
現在は主郭の東肩部に空堀の一部が遺存するのみであるが、観音堂南端に東西200mに及ぶ墓地群があり、江戸時代に空堀を埋め戻したもので、西側と同じく一部空堀が残っていたとのことである。城内には石川氏によると主郭内に熊野社、宝堂地区の北隅には宝塔として那珂氏累代の墓、観音堂620番地には無量寿院として那珂氏の菩提寺、その北側には鍛冶跡を想定している。また、宝堂の西には小字八所宮があり八所宮跡を想定している。その跡は現在、径6m、高さ1.5mの高まりになっている。

観音堂と南の小字梶内の間には急峻な谷が入り、自然の要害になっている。梶内の南の小字陳向と合せ通称皇都原と呼ばれ古墳時代の遺制と考えられている。現状は陳向梶内遺跡として登録され、縄文時代の大集



第17図 那賀城全体推定図 (石川 豊氏作成)

ユクヨ ケイ-30



第18図 那賀城跡と小字名

落である。その他の小字名にも、観音堂西の水走り、御城・観音堂東の台地下の町居・南陳など意味のある名称が残っている。

今回の調査では11世紀代の竪穴式住居跡、室町時代の貯蔵施設の確認に留まったが、那賀城は、一時期でなかったものではなく、時の状況におおじて緊迫、戦乱、居住の中にあったものとする。つまり那賀城跡は11世紀代には胎動し、中世末の16世紀末には鳴動し、江戸時代には廃城したものであろう。

歴史的事象では下野国司であった藤原秀郷の9世孫、藤原通資が那珂郷那賀に移住し、那珂氏となった年代は1115年前後と考えられている。住居跡の廃絶時期とは7・80年違う。この年代は藤原秀郷の7世孫、藤原公通が下野から初めて常陸に進出し、久慈郡大田郷に進拠し、一城を構えた後3年の役（1083～1086）前後、あるいは阿部一族の前9年の役（1051～1062）頃であろう。より近いのは前9年の役である。この時期は源義家が奥州平定に向かい、坂東の武士団も参戦した。松原遺跡からは平安時代の土師器坏で、「依」の墨書土器が出土している。依上郷は久慈郡の奥州境の郷名である。人的交流の証左であろう。

那珂氏は9代、那珂彦五郎通辰の時代に佐竹貞義との金砂合戦に敗れ自刃し果てた。延元元年（1336）のことである。その後、那賀城跡は佐竹氏の家臣、小田野氏によって維持されたと言われている。その佐竹氏も徳川幕府の命により慶長7年（1682）、秋田に移封された。

参考文献

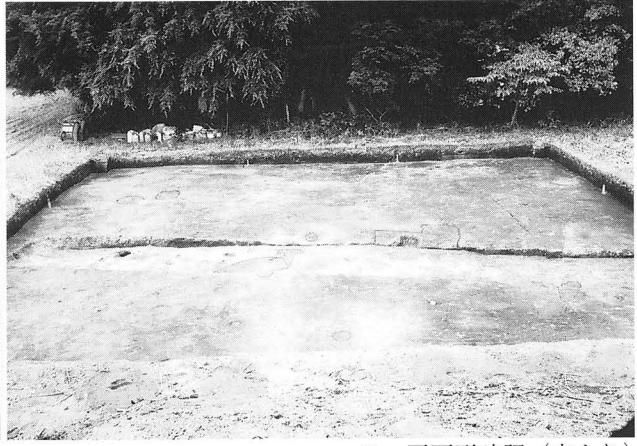
- 石川 豊 『小瀬村史』小瀬村役場 昭和31年
- 石川 豊 『古代那珂郡の研究』 昭和41年
- 石川 豊 『那珂通辰と常陸の豪族』 昭和43年
- 石川 豊 『緒川村史』「原始・古代・中世」 昭和57年
- 石川 豊 『関東公方と佐竹一族の興亡』 昭和61年
- 萩原義照 『松原遺跡』茨城県那珂郡緒川村埋蔵文化財調査報告第2集 平成4年

報告書抄録

ふりがな	なかじょうあと							
書名	那賀城跡							
副書名								
シリーズ名	常陸大宮市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号								
編著者名	河野一也 河野真理子							
編集機関	日本窯業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡馬頭町小砂3112 TEL0287-93-0711							
発行機関	常陸大宮市教育委員会							
所在地	茨城県常陸大宮市中富3135-6							
発行年月日	西暦2005年(平成17年)9月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	番号					
なかじょうあと 那賀城跡	ひたちおおみやし 常陸大宮市 なかあざみじょう 那賀字御城	082252	347004	36° 35′ 30″	140° 19′ 16″	20050526 ～ 20050608	225	電波塔 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
那賀城跡	集落 城館跡	縄文時代 平安時代 室町時代	土坑 住居跡 土坑 掘立柱建物跡 柱列	3口 3軒 5口 2棟 11棟	縄文土器 土師器 中世土器 近世陶磁器			



A 調査前全景 (南より)



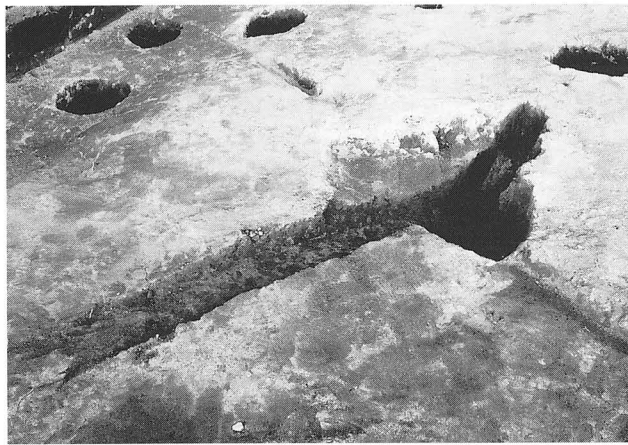
B 平面形確認 (南より)



C 1号住居跡 (西より)



D 1号住居跡遺物出土状態 (西より)



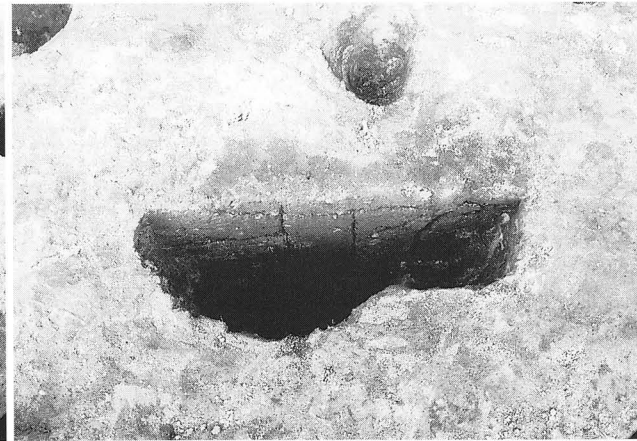
E 1号住居跡カマド前方貼床 (西より)



F 1号住居跡掘方 (西より)



G 1号住居跡カマド掘方 (西より)

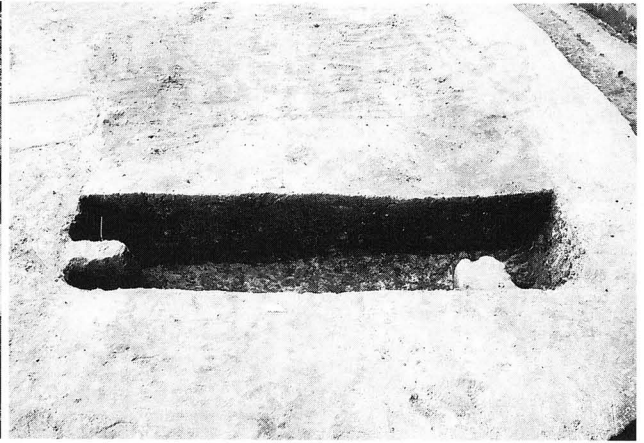


H 1号住居跡内柱痕 (3号住居跡柱穴) (北より)

図版2



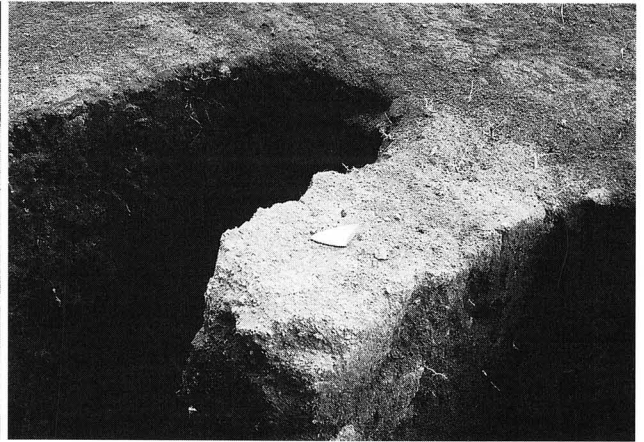
A 2号住居跡北壁土層に床面遺存(南より)



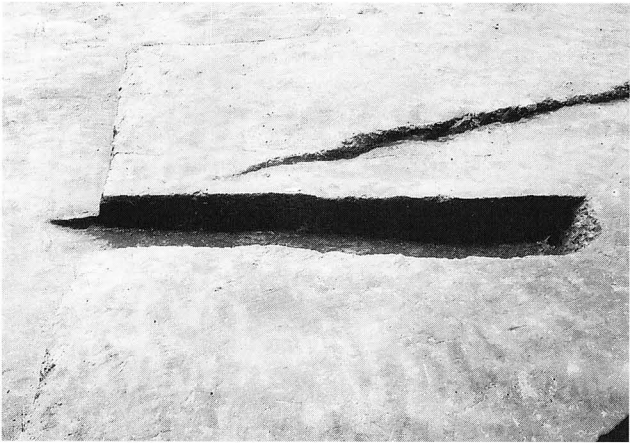
B CD1半截土層(東より)



C CD1全景(東より)



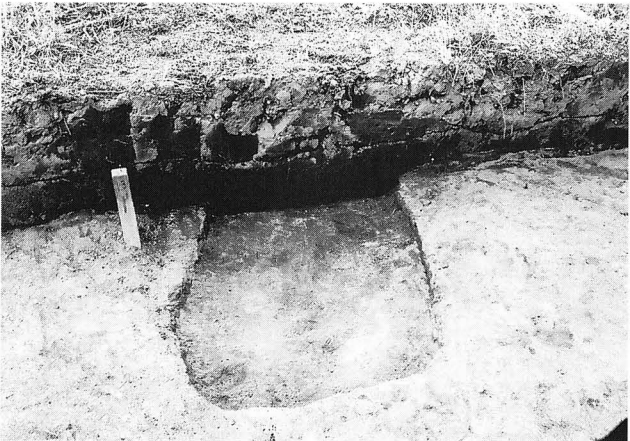
D CD1陶片出土状態(北西より)



E CD2半截土層(東より)



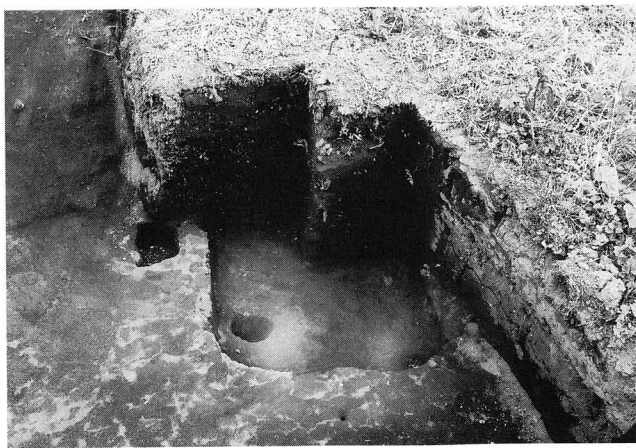
F CD2全景(東より)



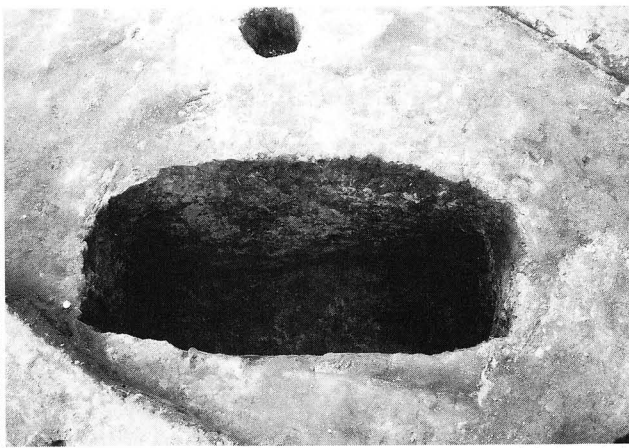
G CD3半截土層(東より)



H CD4半截土層(東より)



A CD4 (北より)



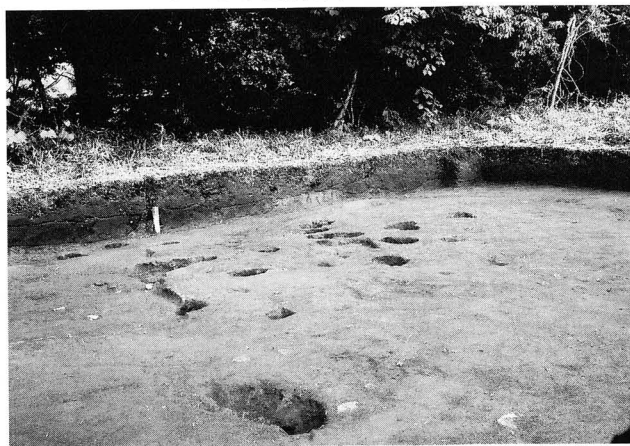
B CD5 (南東より)



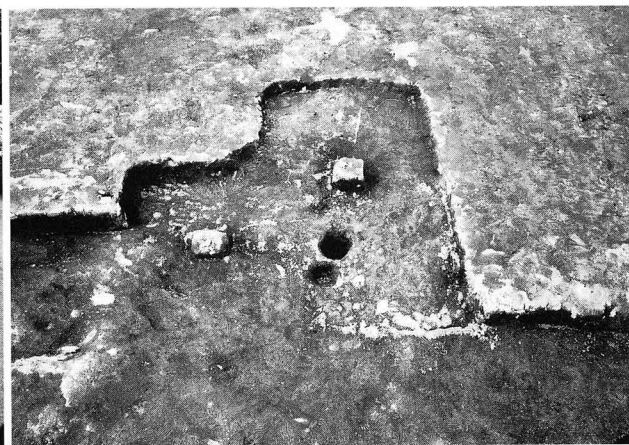
C 1号住居跡、CM1, CD1 (西より)



D 掘立柱建物跡 (東より)



E 調査区北東小穴群 (北西より)



F JD1・2全景 (東より)



G JD3半截土層 (北東より)

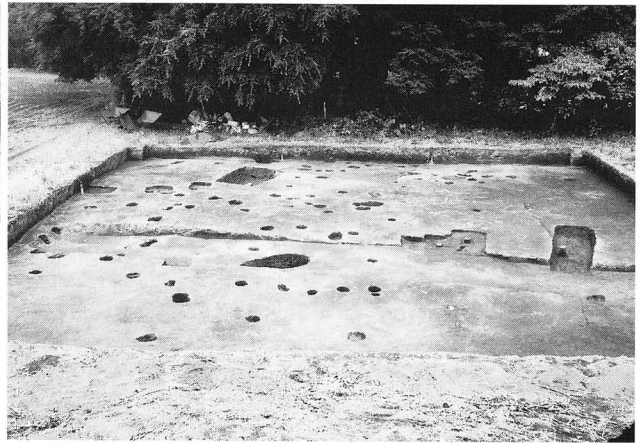


H 東壁南方整地状況 (南東より)

図版 4



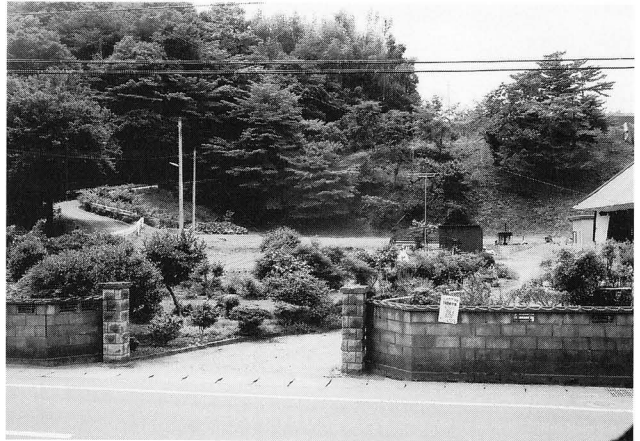
A 南壁下漸移層 (北東より)



B 遺跡全景 (南より)



C 那賀城跡遠景 岩下橋より望む (北西より)



D 那賀城跡 登り口 (東より)



E 調査区東空堀 (北東より)



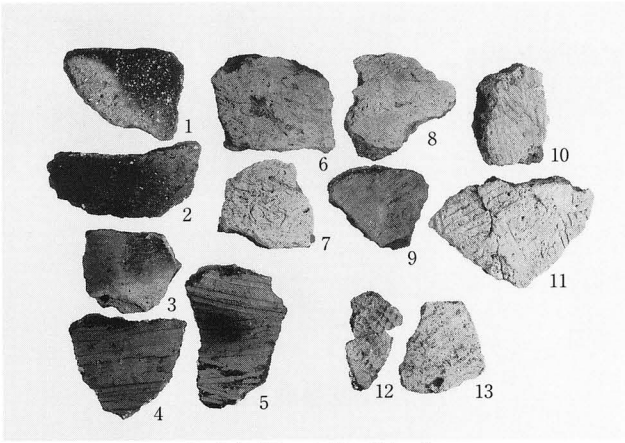
F 那賀城跡 東斜面からの空堀 (東より)



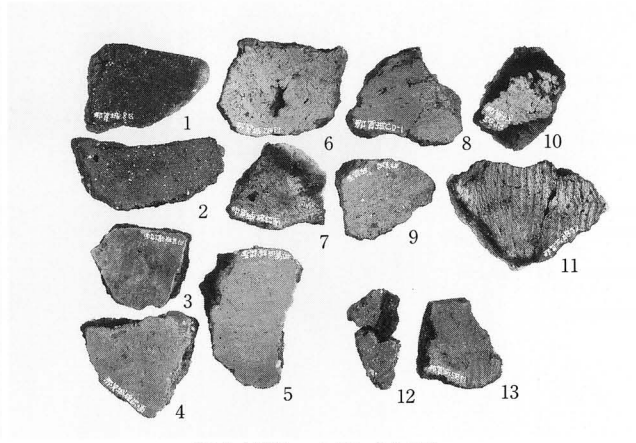
G 那賀城跡 東斜面 (南より)



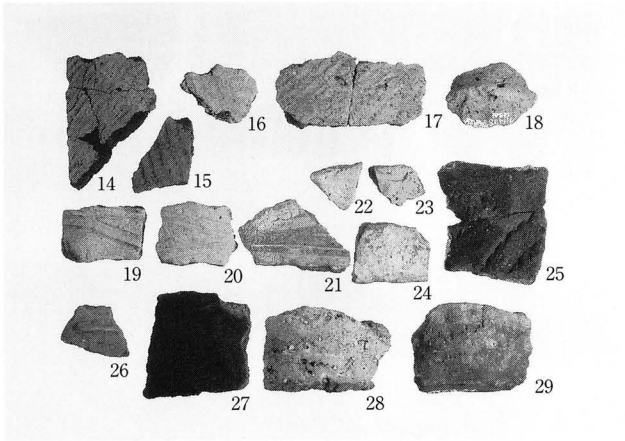
H 那賀城跡 主郭内の間仕切溝 (東より)



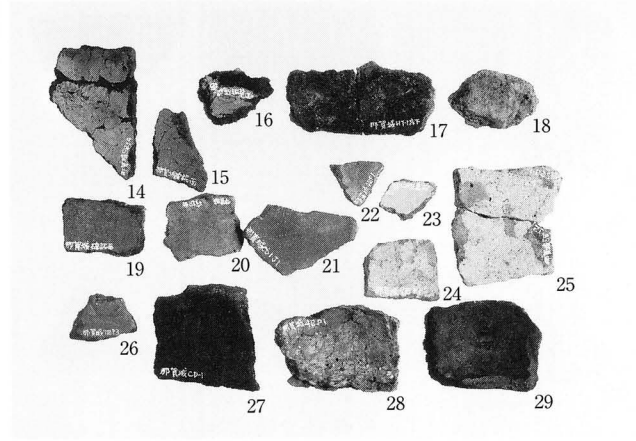
縄文早期の土器 (外面)



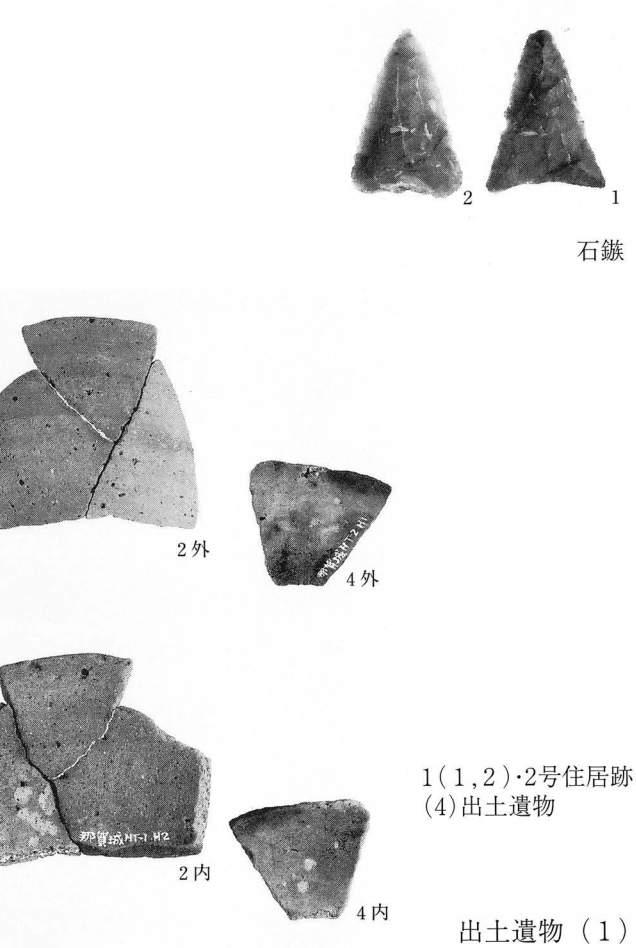
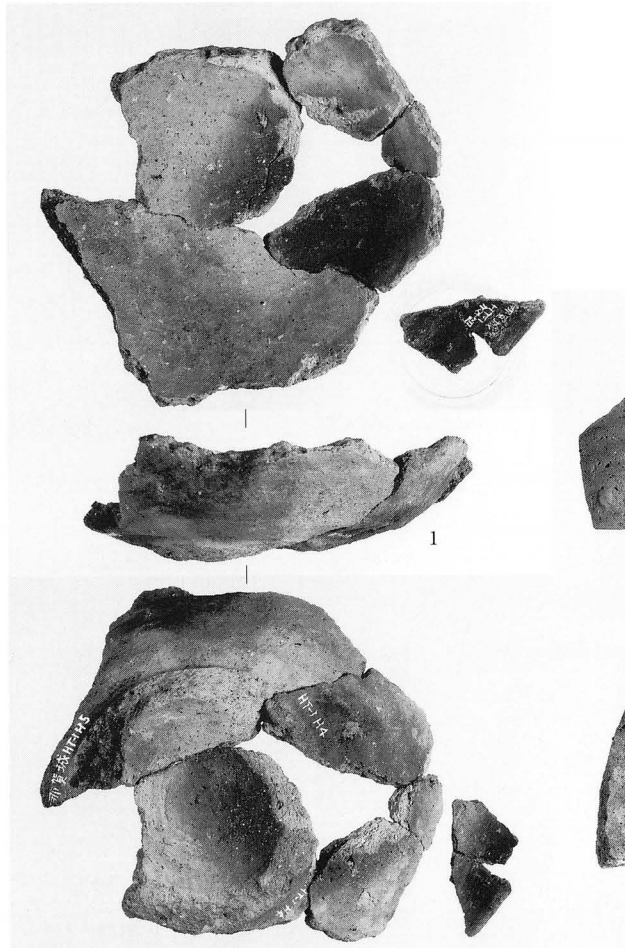
縄文早期の土器 (内面)



縄文前期・中期初頭の土器 (外面)



縄文前期・中期初頭の土器 (内面)

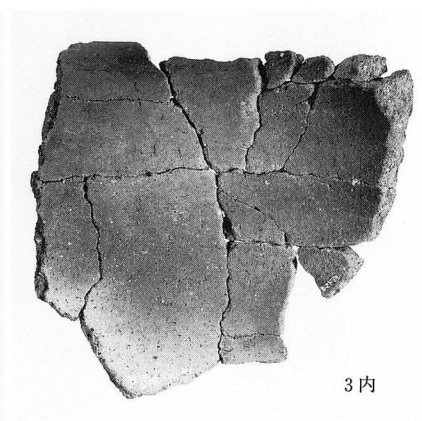
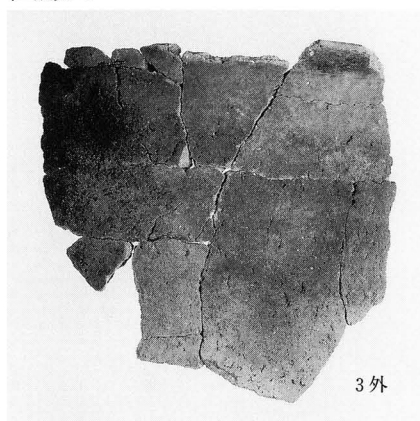


石鏃

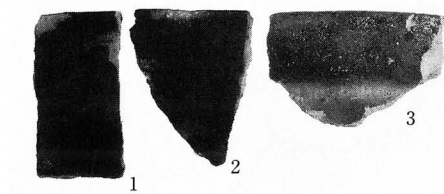
1(1,2)・2号住居跡
(4)出土遺物

出土遺物 (1)

図版 6

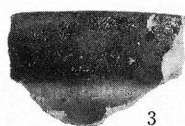


1号住居跡出土遺物



1

2



3



4



1

2



3



4

中世鍋外面

中世鍋内面



5



6



7

中世土師器外面



朝霞城CD2

5



朝霞城外面

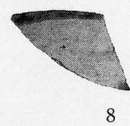
6



朝霞城CD2

7

中世土師器内面

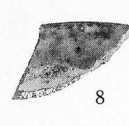


8



9

中・近世陶器外面

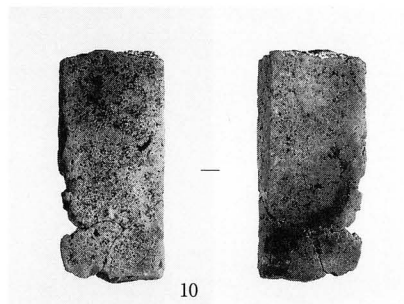


8



9

中・近世陶器内面



10

砥石

中・近世出土遺物

那 賀 城 跡

常陸大宮市埋蔵文化財調査報告

発 行 平成17年 9 月
編 集 日本窯業史研究所
著 者 河野一也 河野真理子
発行所 常陸大宮市教育委員会
茨城県常陸大宮市中富3135-6
TEL 0295-52-1111
印 刷 下野印刷株式会社
宇都宮市宝木町 1 - 28 - 11